

ふじみの



No.42

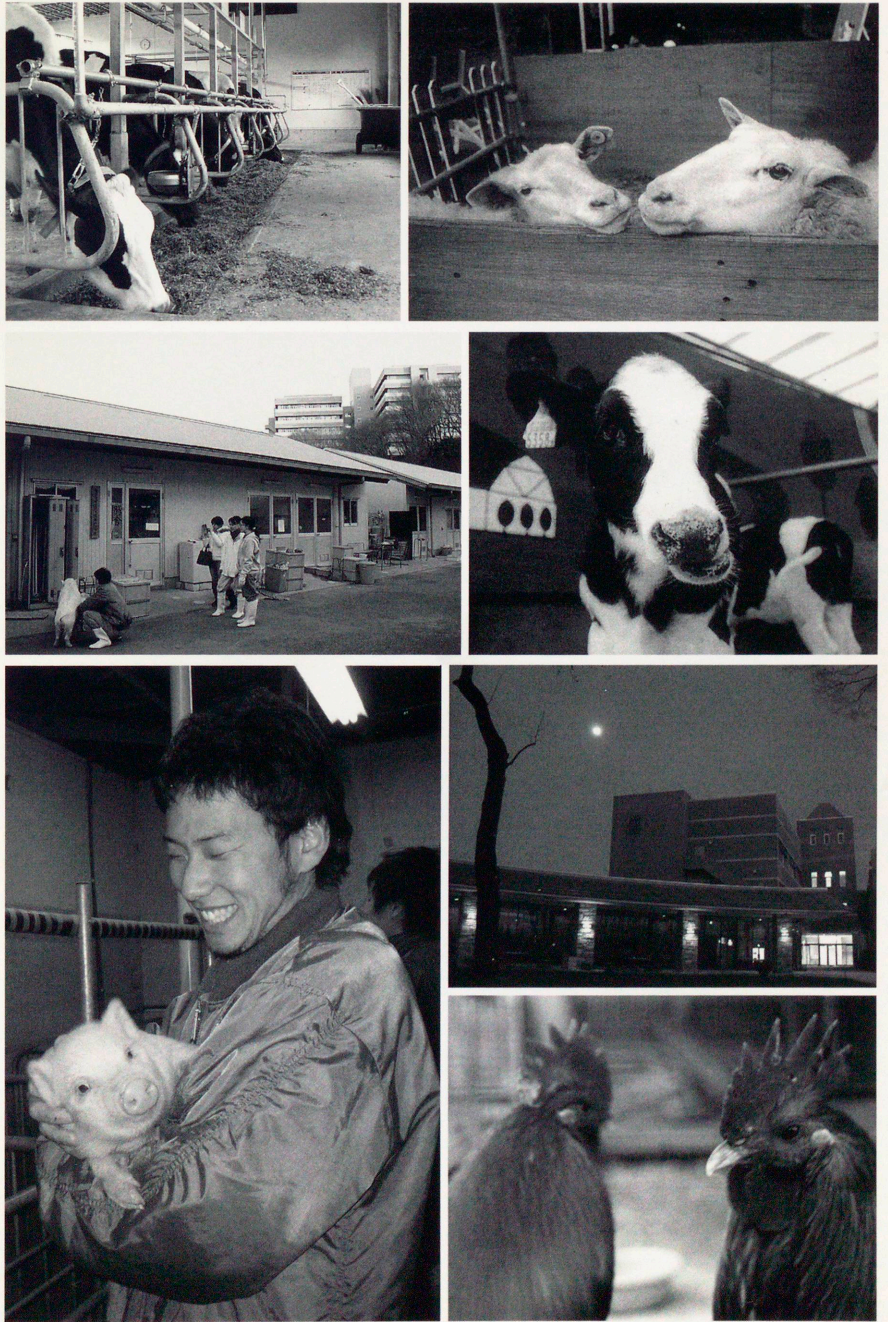
東京農大畜友会

訂正について

	誤	正
P 5 装飾委員長	野口 ちか	野田 ちか
P11 上段・5行目	シバヤギにおけるエストラジオールベンゾネイトの投与が前胎状卵胞の発育に及ぼす影響	ブタ発育途上卵母細胞の体外発育に及ぼす卵胞液の影響について
P11 下段・29行目	希釈液へのトレハロース添加がシバヤギ精子の凍結融解後の生存率へ与える影響 (日本家畜学会発表)	希釈液へのトレハロース添加がシバヤギ精子の凍結融解後の生存率へ与える影響
P12 下段・21行目	第12回日本肺移植研究会	第12回日本胚移植研究会
P12 下段・26行目	第12回日本肺移植研究会	第12回日本胚移植研究会

以上の訂正があります。

ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫言ひ申し上げます。



巻頭言

畜産学科長 栗原良雄

「ふじみの」第42巻の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。
 3月21日に卒業生が社会に巣立ち、その感傷に仕たっているまもなく4月には新入生を迎えキャンパスも活気づいてきました。

まずは、この3月に卒業された皆さんに対して4年間の勉学を終えられ無事卒業されたことに対して衷心よりお祝い申し上げますと共にこれまで支えてくれましたご両親・ご家族をはじめ多くの人たちに感謝いたします。これからは各自健康に留意し、与えられた環境の下でこれまで蓄えた力を遺憾なく發揮して、その存在を示してください。大いに期待をしております。

また、難関を突破して畜産学科にご入学された皆さん、おめでとうございます。衷心より歓迎いたします。みなさんは、今日より畜産を学ぶ我々の仲間入りをしたわけです。これからは今までと違いすべてに積極的に取り組み、自分の行動にはすべて責任を持たなければいけません。それから目標を持つことで

す。その目標に向かって止まらずに毎日一歩一歩前進することが大事です。目標のない人生は、羅針盤のない船と同じでどこに向かって進んでいいのかわかりません。

在校生の皆さんは、これまで歩んできた道をチェックし、たてた目標に向かって歩き始めて下さい。そして、卒業されるときには、「農大の畜産学科で学んでよかった」と言えるように頑張ってください。

最後になりましたが、本誌を発刊するにあたり寄稿していただいた方々、編集に携わった畜友会の役員の皆様をはじめ関係各位に感謝申し上げます。

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長 小林 大樹

菜の花の香り漂い、桜の芽もほころぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第四十二号を発刊することとなりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載するとともに昨年一年間の事業報告を記載します。今年は、厚木キャンパスに移転し早くも六年が経ち、「厚木キャンパス」が地域に浸透し、より土台が形成され落ち着いてきた様に思います。今後もまだまだ変化しつつありますが、その中で学生一人一人が自ら感じた「夢」や「希望」、また「努力」や「不安」などの文章が載せられています。ぜひ、隅々まで御覧いただけたら幸いです。

ふじみの

目次

退職にあたり

農大での4年間

土屋 公幸

巻頭言

栗原 良雄

ふじみの寄稿原稿

ふじみの発刊にあたり

小林 大樹

わが国における食肉加工の変遷
『天草大王のはなし』

松岡 昭喜

同窓会だより

伊藤 澄磨

3年間の意味と意義

原 ひろみ

同窓会会長あいさつ

伊藤 澄磨

集う学友

畜産振興会

伊藤 澄磨

『時の鏡』

東京農業大学畜産振興会 便り

渡邊 誠喜

夕暮れが好き

4年 鈴木眞樹人

研究室だより

渡邊 誠喜

子供のよう
一年を終えて

3年 須田 洋史

家畜繁殖学研究室

渡邊 誠喜

平成十七年度畜友会事業報告

2年 上開地広美

家畜飼養学研究室

渡邊 誠喜

平成十六年度畜友会決算報告

1年 大竹 彩乃

畜産物利用学研究室

渡邊 誠喜

特別会計収支報告

家畜育種学研究室

渡邊 誠喜

平成十七年度畜友会予算

家畜生理学研究室

渡邊 誠喜

特別会計予算

家畜衛生学研究室

渡邊 誠喜

第六回厚木キャンパス収穫祭・
第一一四回体育祭各部門委員長より

野生動物学研究室

渡邊 誠喜

第六回厚木キャンパス収穫祭・
第一一四回体育祭事業報告及び結果報告

東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

渡邊 誠喜

FINISH OFF

統一本部委員長

小林 大樹

ENJOY IT!!

特別企画委員長

協田友紀子

宣伝隊の道を選んで

関 綾乃

みんなに感謝!!

神輿隊長

金井 俊憲

Sports Festival

菅澤奈充子

ジャック☆

3年 菅澤奈充子

槽裝飾委員長

3年 原 真樹子

ありがとうございました。

3年 野田 ちか

家畜苑

3年 坂口 陽祐

家畜苑委員長

3年 関 綾乃

編集後記

3年 関 綾乃

同窓会だより



同窓会会長あいさつ

畜産学科同窓会

会長 伊藤 澄 磨

畜産学科は昭和二十四年に千葉県茂原において千葉農学部として設置され、昭和二十八年に第一期の卒業生を世に出して以来、五十三年の月日を経ることになりました。この間には、七、二六一名の同窓生が国内・外を問わず、畜産業ならびに関連産業において活躍されています。

本会は畜産学科が四十周年を迎えた昭和六十三年十一月に同窓生相互の親睦を図ると共に畜産学科の発展に寄与することを目的に設立されました。平成十二年に厚木キャンパス農学部に畜産学科が完全移転し、平成十四年からは同窓生が厚木キャンパスから巣立っています。これまでの間、同窓各位の協力により着々と左記のような

事業を展開しています。

- 一、畜産学科への援助
- 二、新入会員および卒業祝賀会への援助
- 三、会員名簿の管理と追補版の発行
- 四、同窓会報の発行
- 五、代議員会および親睦会の開催
- 六、優秀卒業論文に対する同窓会賞の授与
- 七、役員会および常任幹事会の開催

昨年度となる平成十七年三月二十一日に執り行われた卒業式においては二一八名の同窓生が誕生し、追補版の会員名簿を発行すると共に、第四号の優秀卒業論文同窓会賞を佐藤大気君に授与しております。授与式後の卒業祝賀会は畜産学科・大学院・畜友会・本会の四団体共同主催で執り行われ、ご父母も参加の下、長い時間教職員、友人達との在学中の思い出話に花を咲かされ、満足されたいと思います。

四月以降となる本年度には代議員会の開催、講演会（畑、杉浦、ナイルの三氏による「畜産物の生産・流通、そして食卓へ」）の開催、世田谷キャンパスに出向き体育祭で奮闘する学生を鼓舞する和太鼓の修復援助などの事業を行いました。

本誌は平成十七年度卒業式当日に発行され皆さんの手元に届けられると伺っております。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日から同窓生としてそれぞれの職場でご活躍されることを祈念致します。国内唯一の畜産学科で学ばれたことに胸を張り、活躍の場面で

は共に過ごした仲間、先輩、後輩、教職員と生涯連絡を密にとっていたことも重要と思います。その際には本会をご活用下さい。

本会に対して準会員である新入生ならびに現役の学生諸君は、在学期間中に生涯の友、恩師に恵まれますよう本会を活用し、恩恵を受けて下さい。在学期間の活動は学問の追究だけに止まらず、課外活動等を通じて幅広い人格形成にあります。文武両道の精神で活躍されますことを祈念致します。



東京農業大学畜産振興会 便り

東京農業大学畜産振興会

会長 渡邊 誠 喜

東京農業大学畜産振興会が発足して、早十五年が経ち本誌に便りを執筆する時期となりました。そこで「ふじみの」発行にあたり、本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介させていただきます。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究所畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可をえて設立されました。会の運営に遺漏なきよう学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることとな

っております。

具体的な事業内容としては、畜産振興会奨学生としての採用が毎年二、四年次生の各学年から一名ずつ計三名、姉妹校留学生並びに渡米農業実習生への交通費の一部支給、優秀卒業論文賞を毎年一名、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生に対する表彰を実施しております。特に学生による論文発表や学会での口頭発表は年々増加し、会計担当理事も嬉しい悲鳴を上げるほどになり、益々本会の意義が高まってきております。また近年、社会の経済不況により学費納入が困難な学生も増えており、これらの学生に授業料などの一時貸与も行っております。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第五期の学科学生ならびに第三期の大学院生博士前期課程修了生および第一期の博士後期課程修了生が卒業いたします。移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにあり、厚木キャンパスは学生のみと云う状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリヤマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈いたしました。これらの家畜は目下、本学富士畜産農場に繋養されており、それぞれ実習・実験の材料として活用され、さらに厚木キャンパス収穫祭の家畜苑にも参加するなど学生に親しまれております。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十

年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも本年度で八号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は振興会会誌創刊号に紹介されているように平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜ったことによります。

設立後、逐次拡大してきた事業を遂行するための資産は、

- 一 東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金
- 二 賛助会員会費
- 三 一般寄付金
- 四 その他の収入

によって賄われておりますが、より一層の充実した事業の展開のためには更なる原資が必要であります。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念いたし、振興会便りいたします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

私たちが家畜繁殖学研究室は、門司恭典教授をはじめ、桑山岳人助教授、佐藤光夫講師、岩田尚孝講師のご指導のもと、大学院生6名、4年生35名、3年生34名で構成され、日々研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜、家禽、また実験動物などの繁殖生理について研究しています。

具体的には、

- ・ 家畜の人工授精、体外受精に関する研究
- ・ 家禽における繁殖行動中のホルモンに関する研究
- ・ 精子、卵子の凍結保存に関する研究
- ・ などのテーマを定め、研究を進めています。最終目標は人間社会に対する有用価値を考慮に入れた家畜生産の技術として確立することです。日常の活動内容は、3年生は繁殖学の基本的な知識、実験方法や技術を身に付けるとともに、シバヤギ、ミニチュアブタ、家禽（岐阜地鶏、ニホンウズラ、セイロン野鶏等）をそれぞれの班に分かれて日常の飼育管理を行い、大学院生や4年生の研究や実験の補助をしています。
- ・ 年間の主な行事は、新入生歓迎会、年2回の納会や大掃除、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会、スポーツ大会、卒業生送別会などがあります。

室員同士とても仲が良いあたたかい研究室です。また、先生方や大学院生とも会話が多く、各々が自分自身の目標にむかって常日頃努力を重ねており、日々の実験と楽しい行事とのめりはりのある充実した研究室生活を送っています。

平成十七年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導教員
伊藤 哲	ニワトリ凍結精子の卵管内での受精能保持日数について	門司 桑山
稲村 早紀	凍結保存液中へのホスホエノールピリン酸の添加がシバヤギ精子の精子生存性に及ぼす影響	門司 岩田
猪股 若菜	長期休産鶏に対する妊馬血清性腺刺激ホルモン投与の影響	門司 桑山
大原 賢二	乳牛の分娩時における血液・尿成分と分娩予測との関係について	門司 佐藤
岡部 健典	NアセチルDグルコサミン添加がブタ卵子の体外受精に及ぼす影響	門司 岩田
	(関東畜産学会発表)	
鈴木麻衣子	乳牛における乾乳期BCSおよび総コレステロール値と分娩後の発情回帰との関係	門司 佐藤
	(関東畜産学会発表)	
高橋 茂樹	ウシにおける発情期の子宮頸管粘液性状と性ホルモンの関係について	門司 佐藤
	(関東畜産学会発表)	
谷口世理子	春季発動前のミニチュアブタに対する性腺刺激ホルモン投与が発情誘起に及ぼす影響	門司 桑山
塚本 美幸	早期離乳における母豚の発情回帰日数への影響	門司 岩田
辻 優美	シバヤギにおける副腎皮質ホルモンによる分娩誘起法の検討	門司 桑山
富山 千恵	ミニチュアブタにおける凍結乾燥精子作製の試み	門司 岩田
豊見山 緑	希釈液へのトレハロース添加がシバヤギ精子の凍結融解後の生存率へ与える影響	門司 岩田
	(日本家禽学会発表)	

小山 智美	ブタ胚のエストラジオール17βの産生量について	門司 桑山
	(関東畜産学会発表)	
葛西 真弓	シバヤギにおけるエストロジオールベンゾネイトの投与が前胞状卵胞の発育に及ぼす影響	門司 岩田
栗田 敦史	ウシ卵巢の胞状卵胞形成に関する研究	門司 桑山
	(関東畜産学会発表)	
黒田 信江	雄シバヤギにおけるセレン(Se)投与が精子生存性に及ぼす影響	門司 岩田
今 義拓	ウシ体外受精培地へのグリコサミノグリカ添加が受精率および性に及ぼす影響	門司 岩田
五島 惟道	ミニチュアブタ生産を目的とした効率的な受精卵回収方法の検討	門司 岩田
	(関東畜産学会発表)	
坂本 麻美	ブタ卵巢の保存方法の違いが卵巣卵子の能力に及ぼす影響	門司 岩田
	(関東畜産学会発表)	
佐藤 一路	HOSTによる凍結ウシ精液の精子の膜性状の評価について	門司 岩田
塩野 紘	Capacitation処理によって分画した家畜	門司 岩田

中村 倫代 シバヤギを用いた水酸化アルミニウムゲルにおける過剰排卵誘起法の確立 岩田 桑山
 長谷川くみ子 雄シバヤギにおける雌フェロモンが血中ホルモンや繁殖行動に及ぼす影響 桑山 門司

蜂須賀章子 ミニチュアブタの連続精液採取時におけるPGF_{2α}の投与が精液性状におよぼす影響 門司 岩田
 花鳥 航平 ブタ凍結保存液中への抗酸化剤、脂質、糖類の添加が融解後の精子性状および体外受精に及ぼす影響 門司 岩田

増尾 誠 ウマの精巢における遺伝子発現解析 門司 岩田
 増山 紗葵 去勢ニホンウズラに対するストレスの負荷が血漿コルチコステロン濃度に及ぼす影響 門司 桑山
 (関東畜産学会発表)

目黒 高志 雄ニホンウズラに対するストレスの負荷が血漿コルチコステロンおよびテストステロン濃度に及ぼす影響 (関東畜産学会発表) 門司 桑山
 山口 奈穂 ブタ子宮内へのエストラジオール注入が胚移植に及ぼす影響 岩田 桑山

山本 茜 岐阜地鶏雌の繁殖期における甲状腺ホルモン濃度について (関東畜産学会発表) 門司 桑山

家畜飼養学研究室

本研究室は動物が生きていくために、どんな飼料をどのくらい、どのようにして与えるかを常に追求しています。これらの妥当性を判断する知識として各動物の行動の理由を理解し、さらには排泄物についても考えねばなりません。これら全ての知識を応用した学問が家畜飼養学です。

本研究室は栗原良雄教授をはじめ、祐森誠司助教授、池田周平助教授、鈴木伸一教授、佐藤光夫講師の指導の下、大学院生二名、四年生三十名、三年生三十名によって構成されています。その成果は日本畜産学会、日本養豚学会、日本家畜管理学会、日本ペット栄養学会等の大会に毎年発表されています。研究室の活動は、春の富士農場での専攻実習と新入室員歓迎会に始まり、卒業論文計画発表会、夏の家畜管理実習(学外)、飼料成分分析実験、秋の収穫祭への参加(模擬店・牛・豚・鶏それぞれ国産のものを使用した串焼き、文化学術展・鶏について知ろう)、冬の畜産関連諸施設の見学を兼ねた研修旅行、卒業論文発表会、卒業生サヨナラパーティー、年二回の大掃除に納会と、盛り沢山です。各活動を通して、室員の団結を深め、それぞれが目的意識を持って有意義な学生生活を送っています。先生方の指導は時に厳しいこともありますが、学生の相談には親密に添えてくださり、厳しさの中にも優しさを感じます。室員は皆仲良く、研究室での時間を楽しく過ごしています。

吉岡 誠司 ウシ胚盤胞期胚の透明帯からの脱出に関する要因について (関東畜産学会発表) 岩田 門司

吉田 麻美 伴性不完全アルビノウズラの繁殖成績について 桑山 門司
 吉原 弘朗 セイロン野鶏と岐阜地鶏との戻し交配により作出されたF₂の繁殖能力について (日本家禽学会発表) 桑山 門司

芳川 史 ミニチュアブタにおけるHCGおよびPGF_{2α}を用いた発情同期化の試み 門司 桑山
 博士論文
 久下 壮 ミニチュアブタにおける発情同期化に関する研究 (東京農業大学学集報50(日本養豚学会誌 第41回第2号, Ani. Reprod. Sci. 91, J.Repro. Dev.52掲載) Zygote 13, Zygote14掲載)

佐藤 寛純 ブタ卵子成熟倍地中のエネルギー基質が核成熟の動態および発生能に及ぼす影響 (第12回日本胚移植研究会、関東畜産学会発表、Zygote 13, Zygote14掲載)
 林 武司 ブタ体外成熟卵子の体外授精時における多精子受精抑制方法に関する研究 (第12回日本胚移植研究会、関東畜産学会発表、Zygote 13, Zygote14掲載)

飯田 真希 岐阜地鶏の産卵および抱卵期における血漿コルチコステロン濃度 (日本家禽学会発表) 桑山 門司
 研究生

平成十七年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導員
天川 和也	乳酸菌の添加が牛糞尿からのアンモニアガス発生に及ぼす影響	栗原 祐森
石川 輔	酵母の添加が牛糞尿からのアンモニアガス発生に及ぼす影響	栗原 祐森
市川 大介	波長の違いが産卵鶏の産卵成績に及ぼす影響	池田 桑山
梅野 翔	金華豚の肉質について	池田 鈴木
大谷 結	富士農場新規草地の収量及び養分収量	佐藤 栗原
奥山紗絵子	梅調味液吸着飼料を産卵鶏に給与した場合の消化率について	栗原 祐森
起 元樹	梅調味液吸着飼料を産卵鶏に給与した場合の飼料効率及び産卵率について	栗原 祐森
金子 誠	黒毛和種肥育素牛の系統による増体及び市場価格について	池田 佐藤
上谷川直人	冬季の牛舎におけるカーテン設置が乳量に及ぼす影響	池田 祐森

川又美弥子	黒毛和種育成牛における給与飼料の切断 長が反芻行動に及ぼす影響	栗原	佐藤	中村 絃子	金華豚の消化について	池田	鈴木
熊之細友美	黒毛和種育成牛における給与飼料の切断 長が採食に及ぼす影響	栗原	佐藤	西山 潤	軽種馬の尿成分の季節変動について	鈴木	池田
小坂 仁美	飼料中繊維の定量法について	栗原	祐森	野中 昭秀	波長の違いが産卵鶏の卵質に及ぼす影響 について	池田	栗原
齊藤 志麻	梅調味液吸着飼料を産卵鶏に給与した場 合の卵質について	栗原	祐森	深澤 明人	富士農場既存草地の収量及び養分収量に ついて	栗原	佐藤
佐藤 真奈	炭による豚糞尿から発生するアンモニア の脱臭効果について	栗原	祐森	古城 義也	富士農場の乳牛における給与養分量につ いて	栗原	佐藤
城田 亮	黒毛和種育成牛における給与飼料の切断 長が糞中粗繊維に及ぼす影響	栗原	佐藤	松浦 幸司	肥育終了3日前の飼料へのグルタミン酸 添加が豚肉の食味に及ぼす影響	池田	鈴木
鈴木真樹人	肥育終了3日前の飼料へのグルタミン酸 添加が豚肉の遊離アミノ酸に及ぼす影響	池田	鈴木	矢後奈都美	炭の形態によるアンモニアの脱臭効果に ついて	栗原	祐森
高橋 和之	炭によるアンモニアの脱臭効果について	栗原	祐森	上林恵梨香	盲腸を切除したラットへの難消化性繊維 給与が体成分に及ぼす影響	池田	祐森
田中 則之	金華豚の成長について	池田	鈴木	大塚有希子	盲腸を切除したラットへの難消化性繊維 給与が飼料の消化率に及ぼす影響	池田	祐森
谷口 千恵	ラットの含水糞中のビタミンB12とコバル トとの関係について	池田	祐森	林 夏生	納豆菌の添加が牛糞尿からのアンモニア ガス発生に及ぼす影響	栗原	祐森
中村 広樹	富士農場の肉用繁殖牛における給与養分 量について	栗原	佐藤	池田 実希	培養細胞のサイトカイン産生に及ぼす発 酵乳由来成分の影響	古川	

畜産物利用学研究室

本研究室は室長の松岡昭喜教授をはじめ、渡邊乾二嘱託教授、古川徳教授のご指導のもと、大学院生5名、大学4年次生33名、3年次生35名で構成される室員が、それぞれ活発に日々の研究活動などに取り組んでいます。具体的には、乳・肉・卵中に含まれる各成分の物理・化学的特質ならびに栄養・生理学的機能特性を品種・個体・分子レベルで追究したり、その研究成果を食品成分の機能性・保存性の改良、製品製造工程の改良や新しい加工法の開発などに応用するための研究を行なったりしています。年間の主な活動としては、週一回行われるゼミナールの他、夏休みを利用して行う世田谷キャンパスでの乳酸飲料製造実習、ハム・ソーセージの製造と収穫祭での販売、卒業論文発表会、新入生歓迎会、前・後期納会、研修旅行、卒業生謝恩会などがあります。

平成十七年度卒業論文題目

飯田 真人	豚肝臓を素材とした発酵肉製品の開発	松岡	指導	門野 裕子	発酵豆乳の血管新生抑制効果	古川	教員
池谷扶紗子	アルコール発酵由来ペプチドのアセチル	古川		清原 剛	豚干し肉の製造に関する基礎的研究	松岡	
コリンエステラーゼ阻害効果				佐藤 友香	乳酸発酵卵白・卵黄の製造と品質について	渡邊	
				澤山 明子	マウスの受動的回避学習に及ぼす発酵乳由来ペプチドの影響	古川	
				田中 唯之	卵白由来ペプチドの乳酸菌増殖作用につ いて	渡邊	

田中菜穂子 OVA特異的¹²⁵I元進マウスのサイトカイン産生に及ぼす乳酸菌の影響

塚田 渉 マウス回腸平滑筋の収縮に及ぼすアルコ古川
イル発酵乳由来ペプチドの影響

寺倉 嶺 乾燥卵白を添加した発酵ソーセイジの細菌学的並びに理化学的性質

時岡 敦 合鴨肉の理化学的性状に及ぼす月齢の影響

鳥谷部 毅 *In vitro*における脾細胞及びマクロファージからのサイトカイン分泌に及ぼす乳酸菌の影響

仲尾日奈子 乳酸菌増殖因子としての脱脂卵黄粉末の機能について

中山 幹井 酒粕中で熟成した発酵ソーセイジの微生物学的並びに理化学的性質

永澤 俊充 マウスにおける加熱オボアルブミン・加熱オボムコイドのアレルギー抑制作用

永原 尚絃 オボアルブミン由来ペプチドの乳酸菌増殖促進と有害増殖抑制作用について

和田 早代 ピーマン及びパプリカの添加がソーセイジの抗酸化性及び発色に及ぼす影響

橋岡 広絵 乳酸菌増殖因子としてのオボムチン・リゾチーム複合体の機能について

平野 祥 特異的¹²⁵I元進マウスの抗体産生に及ぼす乳酸菌摂取の影響

福田 咲 発酵乳由来ペプチドのプロリンエンドペプチターゼ阻害活性

細川 翔 カンガルー肉を原料とした低脂肪ソーセイジの製造

松本 沙希 マウス回腸平滑筋の収縮に及ぼす発酵乳由来ペプチドの影響

吉田 岳 マウス脾臓細胞培養系における卵白酵素分解物の抗体・サイトカイン生成に及ぼす影響

吉村 美加 乳酸発酵卵白の健康機能について

米倉 由理 小豆を含むヨーグルトの試作

松本由香子 赤色ミオグロビン誘導体形成能を有する乳酸菌を用いた亜硝酸塩無添加発酵ソーセイジの試作

大城舞衣子 発酵乳由来ペプチドのアセチルコリンエステラーゼ阻害効果

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、細胞遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室は、天野卓教授をはじめ、花田博文教授、野村こう講師、高橋幸水副手の指導の下、大学院生10名、4年生32名、3年生33名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしては在来家畜の系統遺伝学的研究やクローン家畜の細胞遺伝学的研究などを行っています。

研究室では一年を通して新入室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例委員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生により学会発表などが精力的に行われています。

平成十七年度卒業論文題目

氏名	論文題目	指導 教員
秋元 美穂	ミトコンドリアDNA情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	花田 天野

石川 重樹	標的細胞ノックアウト法によるヒト疾患モデルマウスの解析と応用	花野	佐野 元彦	ミトコンドリアDNA情報に基づくウシ属の系統遺伝学的解析	花野
石川 慈	アノアのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	花野	柴田 康佑	標的細胞ノックアウト法のための組織特異的発現ベクターの開発とその応用	花野
加賀谷 緑	体細胞クローン牛における染色体の分配状況の解析	花野	新海 義人	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	花野
檜村 彩	動物由来肝実質細胞の保存・培養技術に関する基礎的研究	花野	進士 翔一	頭蓋骨の画像情報解析によるニワトリの品種分化に関する研究	花野
片山 智恵	アジアにおけるスイギュウのミトコンドリアDNA情報による系統遺伝学的研究	花野	菅原 理人	体細胞クローン牛における染色体の分配状況の解析	花野
川口 桂介	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花野	鈴木 雅史	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	花野
河嶋 明宏	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	花野	高久 慈	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	花野
栗原 剛	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花野	高橋 新	マールコールのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	花野
栗原 翔一	ヤギの毛質関連遺伝子に関する研究	花野	長谷川 廉人	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	花野
佐藤 暢彦	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花野	三浦 隆雄	マウス胚の発生分化にかかわる転写制御因子の発現パターン解析	花野
宮川 拓也	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花野	望月 寛子	マイクロサテライトマーカーによるヤギの系統遺伝学的研究	花野
森田 正行	マイクロサテライトDNA多型情報にもとづくニワトリの系統遺伝学的研究	花野			
山下 和也	ヤギの毛質関連遺伝子に関する研究	花野			
山本 司	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花野			
吉田 忍	血液蛋白型支配遺伝子によるウシの系統遺伝学的研究	花野			
吉田 佑美	アノアのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	花野			
吉原 将和	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の解析	花野			
和久 怜	マイクロサテライトマーカーによるウシの系統遺伝学的研究	花野			
奥谷 祐介	頭蓋骨の画像情報解析によるニワトリの品種分化に関する研究	花野			
澄村紗也香	アジアにおけるスイギュウのミトコンドリアDNA情報による系統遺伝学的研究	花野			

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤恵教授をはじめ、吉田豊講師、原ひろみ講師、松林尚志副手のご指導のもと、大学院生9名、学部4年次生32名、学部3年次生30名で構成されています。

本研究室では、家畜・家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究をしており、対象動物によって①ウマに関する研究、②ニホンウズラ・ニワトリに関する研究、③ウシに関する研究、④その他の動物に関する研究に大きく分けられます。

①においては、コンディションの変化による血液性状の変動、赤血球膜タンパク質の遺伝子に関する研究などを行っています。②においては、抗原に対する抗体産生能アポトシス・モノクローナル抗体といった免疫学の基礎となる研究、主要組織適合遺伝子複合体(MHC)の分子遺伝学的・免疫学的解析、TLR遺伝子の解析、HSP70遺伝子の解析、腸内細菌と血液性状の関連解析を行っています。③においては、ビタミンA代謝における諸々の現象に関する研究、不死化細胞の染色体解析などを行っています。④においては、アライグマ及び野生ウシバンテンのDNA多型に関する研究が精力的に行われています。

本研究室における日々の活動を紹介しますと、3年次には生理学に関する基礎的な実験の技術を身につけるために講義・ゼミ・実験実習を行うと共に、実験動物の飼育管理、院生・学部4年生の卒業論文の補助として協力し

ています。4年次には前述の研究のほか各個人が興味を持ったテーマを先生方との論議により決定し、卒業論文研究を行っています。院生は、自分の学位論文のテーマに対して日夜研究に精励し、その結果を学会などに発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化学術展・模擬店、研究旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年2回の納会、実験動物・家畜舎大掃除、週1回のゼミナール等があります。

なお、平成17年度の卒業論文題目は以下の通りです。

平成十七年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導教員

青木 怜子 ニホンウズラの孵化から幼雛における血漿液性状の推移 原

天野 幸恵 ニホンウズラ系統間の血漿中免疫グロブリン濃度の解析 原

勇 真吾 乗用馬における血液性状の長期的変動の検討 半澤

市川 泰子 ウマ赤血球系幹細胞に発現するSLC12A4の塩基配列の解析 半澤

鈴木 辰徳 ニホンウズラHSP70遺伝子(C)HSPA6のRT-PCR解析 半澤

関口 順子 ニホンウズラのTLR2遺伝子の解析 原

千賀亜珠加 アライグマのMHCクラスII遺伝子の多型解析 半澤

堤 皓司 牛RBP、TTRに対する特異的ポリクローナル抗体の作製と牛の甲状腺、肝臓及び腎臓の免疫組織学的解析 吉田

中村 彰利 ニホンウズラMhc領域DNA多型マーカーを用いた家系解析 半澤

長澤 汐美 抗ウシBLG抗体作製および牛の乳汁ならびに血液中BLGとVA群の量的解析 半澤

永堀 光司 ニホンウズラにおけるHSPA9の構造解析 半澤

西島 治美 ISH DNAを用いたニホンウズラの腸内細菌叢の菌種の同定 原

二ノ宮啓介 ニホンウズラHSP70遺伝子(C)HSPA2の多型解析 半澤

岩城亜也子 ニホンウズラ免疫組織細胞に対するモノクローナル抗体の特異的抗原の同定 原

江村 貴子 HIF-2 α の結合因子AK1の機能解析 半澤

大類 賢 ニホンウズラの加齢に伴う消化器系の β デフェンシン遺伝子mRNA発現量の調査 半澤

長田 明雄 家畜ウシの糞DNA抽出法の確立と野生ウシバンテンへの応用 松林

小野寺英美 ニホンウズラのTLR4遺伝子の解析 半澤

川元由里衣 モノクローナル抗体によるニホンウズラT細胞膜表面抗原の解析 原

城戸 健嗣 乗用馬における密度別分離赤血球の浸透圧脆弱性の年間変動 半澤

洪江 理子 ニホンウズラのリンパ球特異膜抗原の解析 半澤

杉本 直樹 低酸素反応因子HIF2 α を介した、結合因子AK1によるエネルギー代謝調節の機序解析 半澤

杉山 緑 ウマ赤血球系幹細胞に発現が予想されるアミノ酸輸送体遺伝子の塩基配列の解析 半澤

林 篤史 ニホンウズラの熱ショックタンパク質半澤

CJHSPA2およびCJHSPA8の熱ショック応答性に関する研究

東田 拓也 ニホンウズラHeat Shock Transcription Factor(HSF)に関する基礎解析

半澤

藤原 浩明 ニホンウズラTAP2繰り返し配列の多様性解析

半澤

堀田 晋哉 ニホンウズラMHCクラスIIβ主働遺伝子(主働CoIIβ)の多様性解析

半澤

堀 悠貴 ニホンウズラの各種消化器官におけるβデフェンシンのmRNAおよびペプチドの局在に関する研究

半澤

松本 郁親 ニホンウズラ偽好酸球の分離および抗体作製

半澤 原

水野 達郎 ニホンウズラにおけるHSPs遺伝子の完全長cDNAの解析

半澤

横山 祥子 ニホンウズラの腸内細菌叢確立過程の推移

半澤 原

清水 元太 成熟培養下のウマ赤血球系幹細胞に発現が予想されるSLC7A9およびSLC3A1の塩基配列の解析

半澤

家畜衛生学研究室

わが家畜衛生学研究室は、室長の渡邊忠男教授をはじめ、井上武教授、村上覚史助教授のご指導のもと、大学院生三名、研究生四名、四年生三十四名、三年生三十五名で構成されています。

室員は各自で希望する対象動物別に、実験動物班、牛班、豚班、鶏班の四班に分かれ、各家畜・家禽等の疾病とそれに対する予防法および環境衛生などの研究を行っています。

「家畜・家禽の生命を脅かす種類の健康阻害因子を除去および予防し、生命の延長をはかり、かつ生産性の向上を目的とする」が元来の家畜衛生であります。しかし、最近では「動物の福祉」という観点から家畜伴侶動物(コンパニオンアニマル)の衛生管理法など家畜家禽以外の各種動物も対象となってきました。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭では模擬店で「しし汁」を出店し、文化芸術展にも参加、その他に年二回の納会、研修旅行、月二回の定例会、年末には餅つき、慰霊祭等があり室員の団結を深めます。各々が目標意識を持って有意義な研究および研究室活動を行っています。

なお、平成十七年度の卒業論文の題目は次の通りです。

平成十七年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導

大谷 将史 豚扁桃の形態学特徴について 村上

秋葉 啓由 ダチョウ農場における糞便内寄生虫卵について

渡邊 西脇

押山 美香 サプリメント投与がミニブタの糞臭気及ぼす影響

渡邊 村上

鈴木 養豚場の飼用管理状況の把握と改善点

渡邊 村上

鈴木 友美

飯塚実乃里 鶏痘ウイルスに対する合鴨の感受性

渡邊 村上

村上 嶺士 市販魚油添加食品の給与が犬に及ぼす影響

渡邊 村上

村上 響

池田 慎 富士農場飼養鶏のサルモネラ浸潤予察調査

渡邊 西脇

小林 健太 猫の体表付着細菌の検討

渡邊 村上

村上 小細澤梨絵 学校等の飼育動物に対する衛生学的考察

渡邊 村上

渡邊 西脇

石田 恵子 ウズラ系統間のコキシジウムに対する感受性の差異について

渡邊 村上

渡邊 酒井明日美 市販シャンプー剤が犬の被毛に及ぼす影響

渡邊 村上

渡邊 村上

磯部 直樹 肉用種鶏の移行抗体がヒナの抗体産生に及ぼす影響

渡邊 西脇

渡邊 坂本美美子 繁殖和牛の内部寄生虫について

渡邊 村上

渡邊 村上

伊藤亜希子 本学飼育反芻動物の内部寄生虫に対する疫学的考察

渡邊 村上

渡邊 佐々木綾香 衛生管理を中心とした酪農の実態調査

渡邊 村上

渡邊 村上

生方 仁 ビタミンAの投与が豚肉の脂肪交雑に及ぼす影響

渡邊 鈴木

渡邊 佐々木翼 鶏痘ウイルスに対するホロホロチョウの感受性について

渡邊 村上

渡邊 村上

佐藤 綾佳 乗馬の糞便内寄生虫卵について

渡邊 村上

牧野 宏美 哺乳動物における血球形態の比較検討

渡邊 村上

佐藤 恵理 フライスランド種細羊の血清性状について

渡邊 西脇

松本 直樹 消毒剤の豚サーコウイルスに対する効果

渡邊 村上

鹿戸 彩子 希釈温度の差異が消毒剤の効果に及ぼす影響

渡邊 村上

矢作 薫里 高齢犬の繁殖に関する研究

渡邊 村上

杉山 慶多 犬ケージ内付着細菌に対する消毒法の検討

渡邊 村上

中西祐美子 生乳検査からみた衛生管理の検討

村上 渡邊

田中 悠基 市販ヨーグルト給与が犬の腸内細菌に及ぼす影響

渡邊 村上

若林久美子 成ミニブタに対する訓練の試み

渡邊 鈴木

谷口 暁美 衛生害虫に対する誘因物質の検討

渡邊 村上

玉城 常智 原猿類頭骨の計測値を使った系統分析

渡邊 村上

鶴 さやか 豚の品種間における頭蓋骨を対象とした考察

渡邊 村上

成田 修司 ピロリ菌の接種が豚の血清性状に及ぼす影響

渡邊 西脇

牧島 美香 豚扁桃由来細菌に関する研究 —特に大腸菌について

村上 渡邊

野生動物学研究室

本研究室は土屋公幸教授、安藤元一助教授、小川博助教授の指導のもと、室員がそれぞれの研究活動を行っている。

我々は家畜の祖先である野生動物の分類や行動、生態学的な研究を行うため、フィールド調査（サンプルの捕獲や生態行動観察等）を行っている。また、研究室で動物を飼育し、繁殖、成長などに関する研究や、細胞遺伝学のおよび分子遺伝学的な研究を行っている。

研究の対象は、モグラ、モモンガ、ムササビ、コウモリ、ネズミ類などの小型哺乳類、ノネコ、アナグマ、タヌキなどの中型哺乳類、ニホンザル、シカなどの大型哺乳類である。また、近年日本の生態系に影響を及ぼしている、外来種のアライグマやハリネズミ、タイワンリスなども研究対象としており、他にもウズラ、ホロホロチヨウ、スズメといった鳥類の生殖や生態といった幅広い研究を行っている。

これらの研究を通して、生物資源として重要な野生動物の種の保存、および特性の解明を目指している。

平成十七年度卒業論文題目

氏名 論文題目 指導教員

五十嵐 拓 東京農業大学キャンパス周辺における中安藤型哺乳類とネコの食物競合

北村 洋輔 アズマモグラ (*Mosera imatsumii*) における土屋地中生息深度の季節変化

池田 和生 アブラコウモリ (*Pipistrellus abramus*) のねぐら選択とねぐら内温度の関係について

石綿 祐子 市街地の分断林におけるタイワンリスの生息状況

伊藤 大輔 カモ類における保定時の血漿コルチコスロン濃度の変化

岩原 真 神奈川県内におけるアライグマ個体群の年齢構成繁殖率、および摂食習性

上野進一郎 アズマモグラにおけるモグラ用忌避剤の効果試験

大野由美子 丹沢山系大野山における牧場環境が野生動物に与える影響について

角田 彩 ニホンモモンガの営巣場所選択と繁殖について

角谷 冴子 クロキツネザル (*Eulemur macaco macaco*) におけるマイクロサテライトDNAを用いた父子判定の試み

川崎 泰敬 *Apodemus* 類における生化学的標識遺伝子の多型解析

安藤 宏美 哺乳動物における血球形態の比較検討

渡邊 村上

松本 直樹 消毒剤の豚サーコウイルスに対する効果

渡邊 村上

矢作 薫里 高齢犬の繁殖に関する研究

渡邊 村上

桐原 崇 下顎骨多変量解析に基づく日本産モグラ 土屋
類分類の試み

郷内 麻香 タイワンリスの人馴れについて 安藤

後藤真美子 中型哺乳類による側溝の利用状況 安藤

佐久間 光 牧草地(休耕地)における小型哺乳類相 安藤
について 小川

佐々木 愛 鳥類異種間杯盤葉キメラによる移植細胞 小川
由来の後代の産出

佐藤 夏実 アズマモグラの光の識別能力に関する研究 土屋

清水 泰輔 毛無山山麓植林地における林床環境の違 小川
いと小型哺乳類および鳥類の巣箱選択率

鈴木 圭 ニホンモモンガ(*Pteromys momonga*)の食 安藤
性と行動圏から見た環境利用

宗田湖都美 下顎骨の多変量解析に基づくヒメズ(*Uro- 土屋
trichus talpoides*)の分類の試み

津吹 由樹 ステップレニング(*Lagurus lagurus*)におけ 土屋
る繁殖習性と成長に関する研究

土手 隆彰 広島市におけるオヒキコウモリ(*Tadarida 安藤
insignis*)の糞内容物の解析

茂木 邦人 東京農業大学厚木キャンパスにおけるア 土屋
ズマモグラ(*Mogera imaijima*)の行動圏の
解析

吉野 七奈 逃走距離から見るスズメの人馴れ現象 安藤

中尾 香葉 トリトンハムスター(*Fischeria triton*)にお
ける飼育管理方法と糞中コルチゾール濃
度との関係

中津真由美 代理卵殻法による簡便なウズラ胚の培養 小川
法の検討

長沼 良倫 静岡県伊東市におけるマンシュウハリネ 土屋
ズミの分布中心部と分布端におけるテレ
メトリー調査

藤本 俊之 神奈川県における広域獣害防止柵のシカ 安藤
被害防止効果の検証

藤本 竜輔 丹沢山系におけるカワネズミ(*Chimarrus 安藤
ale platycephalus*)の食性と餌資源の関係

本田 貴子 アレチネズミ亜科3種における繁殖習性 土屋
と仔の成長過程の比較

増田 知世 アルメニアハムスター(*Cricetus nigra 土屋
torius*)の繁殖習性と成長に関する研究

松井 浩気 小田原市に生息するマンシュウハリネズ 土屋
*(Erinaceus amurensis)*の日周活動調査

村上 友和 神奈川県に生息するニホンザルの生息環 安藤
境と人からの逃走距離との関係

退職にあたり

農大での4年間

野生動物学研究室教授

土屋 公幸

私は昭和38年に農大農学部農学科を卒業し、それから36年経った平成14年4月に、畜産学科野生動物学研究室の2代目の教授に就任した。

世田谷での私自身の任用式が終わり、新入生の入学式も終了すると厚木での生活が始まった。私が学生時代に用賀農場が無くなり、代わりに購入された厚木農場は笹が生えているだけの小高い丘陵地帯であった。当時は朝経堂駅前に集合し小田急電車で本厚木駅に着くと、駅から農場まで畑の中の道を歩いた。その何もなかった農場が今や木々が生い茂り、ケヤキの大木が並んでいるのに40年という時の流れを感じた。

これまで20年間勤務した国立大学は医学部だけの単科で、学生を指導することはほとんど無く、実験動物学の講義以外は研究だけという毎日であった。ところが農大では、登校したその日から、授業の準備に追われる毎日が始まり、研究室には卒業論文指導の学生たちが20名以上もいて、さらに前任地から持参した野生ネズミ類の飼育も始まった。あつという間に前期が終わり、夏休みは1日も休みが取れないまま後期が始まった。収穫祭が厚

木キャンパス独自に開催されていて、文化芸術展に野生動物学研究室も参加するという。研究室の学生達が学んだことを、農大以外で私が学んだ博物館学や実際に博物館に勤務した経験が大いに役立った。

私が学生だった当時は農大には博物館学講座が無かった。そこで立教大学文学部に開講されていた博物館学講座の特別聴講生になった。授業の合間を縫って1年間池袋まで通学し、学芸員の資格を取得した。そして、3年生の終わりにアフリカ縦断学術調査を行った育種学研究室近藤典生教授が持ち帰った鳥類標本を、剥製師の上路忠雄氏に師事して本剥製作りや、ジオラマ制作まで手伝った。卒業と同時に就職した育種学研究室で伊豆シャボテン公園の動物飼育係の担当になった。その後、国立科学博物館動物第1研究室の非常勤務職員になってネズミやモグラの捕獲、飼育、標本作製などに従事した。その間に時々展示品の模様替えがあつて、説明文作成や入館者の行動調査などに従事して、どのような展示物や展示法が良いのかを学んだ。

文展の展示などについて、この学芸員としての勉強やその後の経験が大変役に立った。文展が近づき、展示物の説明文を書いたり、パンフレットを作る学生たちそれぞれが、自分が今何をするべきかが判っていて努力する姿に感心した。その結果が四年連続学長賞受賞となった。喜びの文展の打ち上げを狭い我が家で行うことになった。きっかけは、収穫祭に鹿肉料理の店を出すことにな

り、有害獣駆除の鹿肉を買ったが、調理して販売できないことが判った。そのため販売可能な鹿肉を北海道から改めて購入した。そこで宙に浮いてしまった駆除鹿肉を私が購入し、我が家で食べる分には問題が無かろうと言うことで、打ち上げの焼き肉大会がまとまった。交通費をかけて30人以上が集まった。若者がこれだけそろうと食欲もすごく、我が家の冷蔵庫は気持ちが良いくらい空っぽになる。受賞が続くので打ち上げ会を我が家でするのが恒例になって、3年生が中心の集まりだが、味をしめた4年生や卒業生までが潜り込んだりして年々参加者が増えていった。

一方、カレッジ講座のひとつに、畜産学科では「野生動物を調べてみよう」というのがある。野生動物学研究室が主催して富士農場に宿泊して動物の調査法を学ぶというのであったが、ネズミ類の捕獲に鳥獣捕獲許可証が必要になったため、開催できなくなって終了した。次に「畜産学科の授業」を体験するというのが企画されたが、参加者が少なく1回だけで終了した。何か無いのかと言うので「小型鳥獣の博物館標本作り」を企画したところ案外評判が良く、結局7回実施して参加者は60人余りになった。夏休みには中学生や農大受験を希望する高校生の参加もあり、何回も受講する人もいた。この講座はウズラとネズミを剥製標本にするのだが、維持しているネズミ類は十分に供給できるが、ウズラは他の研究室で維持している個体の中から不要になったものを分けてもらい使用した。講座は5人を定員としていたが、希望者が多いため

毎回10人までは受け付けることとなった。当初は1回が4時間あれば充分だろうと考えたが、本剥製にはとても時間が足りず、さらに3時間延長した。実際にはそれでもだめで、毎回10時から19時までかかっていた。最終回の12月受講生の中に、農学部の学芸員講義の教職員とその学生がいた。その学生が私と大学での同級生なのにはびっくりした。

あつという間の4年が過ぎようとしている。あとは13人の卒論と4人の修士論文を完成させれば教授としての任務は終了する。

農大の「お宝」である30種2000匹の野生ネズミたちは、卒論研究に使用されたり、共同研究に使われたり、動物園に寄贈したり交換したりしてきた。それらのうちハツカネズミ類はつくば市にある理化学研究所リソースセンターにすでに寄贈した。それ以外の各種のネズミたちはそれぞれの研究者や動物園が引き取ってくれることになって、農大からは消滅することになる。

さあ、問題は研究室に散乱している荷物である。書籍は買ってくれるところがあつて、ほとんど無くなった。それ以外の荷物類は捨てるしかないので整理をしなければならぬが、2月中旬以降にならなければ時間がない。就任する時に持参した大型の冷凍庫には順番待ちの動物が山のように保存されているが、それらを剥製標本にする時間があるのかどうか、ちょっと心配になってきた。農大での4年間は、最後まであわただしいままに終わりでそうだ。

わが国における食肉加工の変遷

畜産物利用学研究室教授

松岡 昭喜

食肉加工の歴史は極めて古く、文献に残されている最古のものは、いまからおよそ3000年前のギリシャ時代に書かれたホメロスの英雄叙事詩「オデュッセイア」のなかにある、ギリシャの勇将オデュッセイウスとイロスとが闘うことになった折に「勝者に脂身と血を詰め、山羊の胃袋を進ぜよう」という一節といわれている。現在のブラッドソーセージに当たるものと考えられています。この時代にすでに現在のようなケーシングに詰めるソーセージの原形が出来ていたといえます。

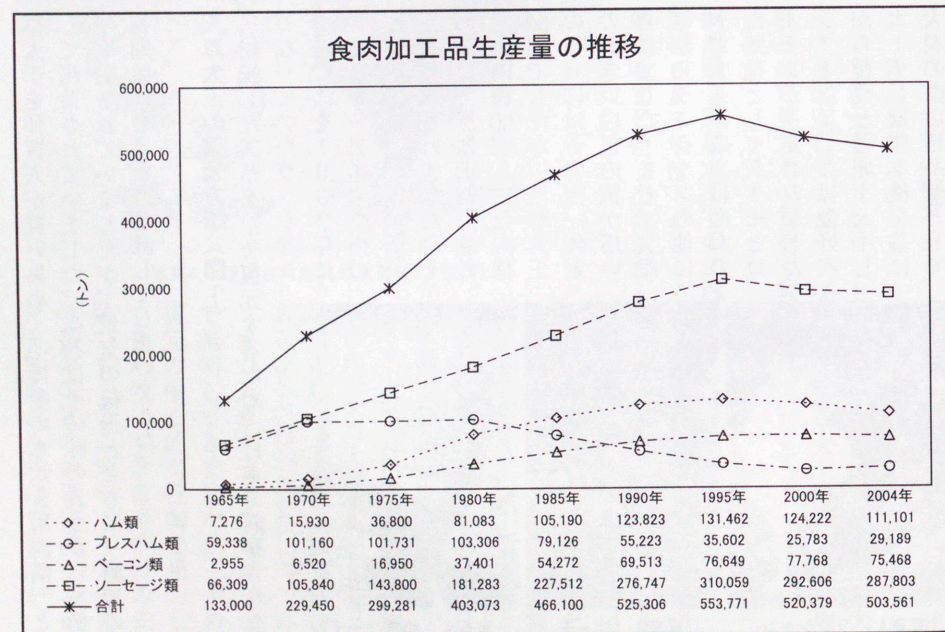
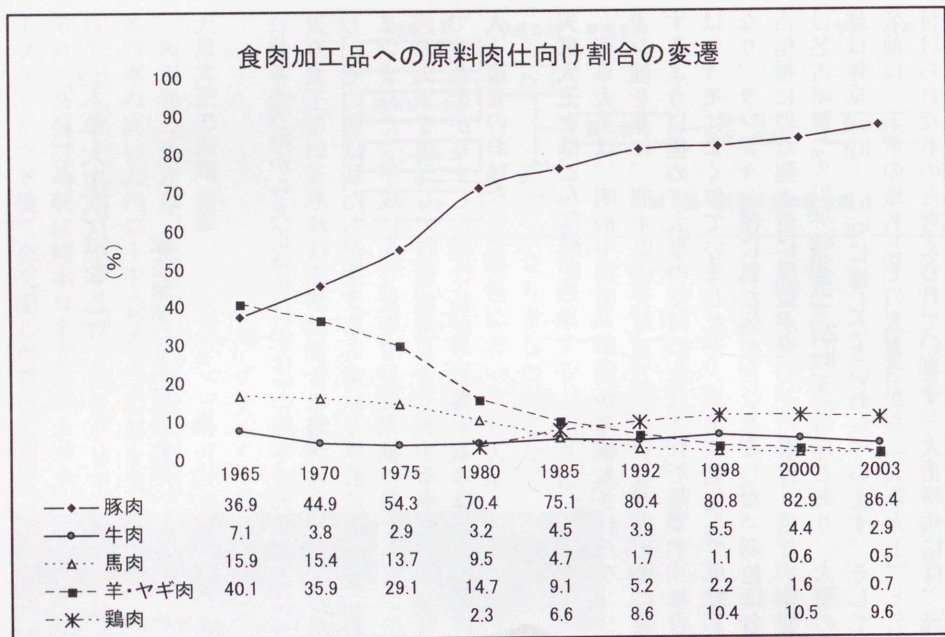
一方、わが国のハム・ソーセージの歴史は、ヨーロッパと比べると先日始まったばかりという感があり、江戸時代に長崎出島のオランダ屋敷でハムやベーコンと共にソーセージが製造されていたと伝えられています。当時出入りしていた役人や商人などが食べていたと推測されます。記録に残っているソーセージを食べた日本人第一号は、第一回遣米使(1860年)の随員森田岡太郎といわれ、その日記に「豚肉に胡椒を混ぜ、豚の百尋に詰め込み、油で煮たものがこのほか美味しかった」と記されています。明治時代になって明治5年に長崎市大浦の

片岡伊右衛門が長崎に来訪したアメリカ人のペンスニからハムの製法を教わり、工場を建設して製造を始めたという記録が残っており、これが記録の上でわが国における「ハム・ソーセージ製造の事始め」といわれています。続いて北海道開拓使庁が明治6年に東京農事試験場で、同じく9年に札幌養豚場で火腿(ハム)を試作しています。明治7年にはわが国初の鉄道建設に尽力したイギリス人ウイリアム・カーテスが神奈川県鎌倉郡川上村でハムの製造を開始し、後に製造技術を伝授された斉藤満平が明治20年に日本で最初の本格的なハム製造業に乗り出しました。これがわが国のハムの代名詞ともなった「鎌倉ハム」の始まりとなったのです。

一方、ソーセージは仮名垣魯文や辻陽太郎によってソーセージの製法が紹介されていますが、本格的にソーセージの製造が始まったのは大正に入ってからです。第一次大戦において青島で捕虜になり、千葉習志野の捕虜収容所に収容されていたドイツ兵のカール・ヤーンは、ドイツの食肉学校を卒業した熟練工で、自身でも加工業を経営した経験があり、彼から畜産試験場の飯田吉英がドイツ式の製造法を聴取、技術指導を受け、民間に紹介したことがその後のハム・ソーセージの生産に大きな影響を与えました。また、製缶会社に招聘されたアメリカ、スイフト社の技術監督を務めたこともあるドイツ人技術者カール・レイモンやかつてのドイツ人捕虜であったバン・ホーテン、ヘルマン・ウオルシュケイ、オーグスト・ローマイヤー、ブチングハウスらはその後も長く日本に

留まり、多くの日本人技術者にその製造技術を伝えると共に、自らも製造販売に従事し、ソーセージの普及に重要な役割を果たしました。しかし、大正期は食肉加工品ではハム、ベーコンや牛肉缶詰が中心で、ソーセージは内蔵を用いることからまだ馴染めない人が非常に多く、昭和20年代中頃までは一部の裕福な人に利用されたにすぎず、一般に広く普及するまでには至っていませんでした。昭和初期には腿をハムの原料としてカットした後の当時としては余り利用されていなかったロース肉を巻き絞めてロールハム(ロースハム)が開発されましたが、脂肪が多く脂っこいため余り普及しませんでした。また、ソーセージの中に豚肉の代用として牛、馬、マトン、兎の小肉塊を混ぜて脂肪の少ない安価な「寄せハム」(プレスハム)が造られるようになり、これが一般大衆にも広く受け入れられるようになって、ハム・ソーセージの普及に大いに貢献しました。しかし、第二次大戦に突入し終戦間近になると食糧事情は逼迫し、食肉加工業も生産をほとんどストップせざるを得ませんでした。大戦後の混乱が落ち付き始めた20年代後半にはいると、所得の向上、食生活の改善に伴って畜産食品の消費増大が進み、それに伴ってハム・ソーセージの需要も伸び始めました。さらに日本水産、日魯漁業、大洋漁業など大手水産会社が南太平洋での水爆実験の影響で市場性がなくなったマグロ類を原料として、通気性のないケーシングに詰めた魚肉ハム・ソーセージの製造販売を始め、栄養価に富み、食肉製品より安価であり、常温で保存が可能で、八百屋

や乾物屋などでも販売できるなど、手軽に利用できることから大ヒット商品となりました。また、魚肉を用いた安価なウインナーソーセージも大ヒットし、この需要の後押しと学校給食の実施により若い世代の人たちの食欲が動物性タンパク質や脂肪を好むようになった影響から、食肉製品の需要も加速されることになり、これが政府の所得倍増計画と相まって消費者の好みも次第に魚肉製品から畜肉製品へとシフトして、昭和30、37年の平均伸び率は20%にのぼり、食肉加工業は急成長を遂げました。特に大手メーカーが大きく躍進した時期でもあります。この頃の主力製品はプレスハムとソーセージで、需要の伸びと共に原料不足に陥り、豚肉は、養豚の奨励で増えたものの、大部分が農家の副業であったこと、豚肉価格の安定化が行われていなかったため、豚価高くなると飼養頭数が増え、供給が過剰になると暴落して飼養頭数が減少するという、所謂ビッグサイクルをほぼ3年周期で繰り返して、供給と価格が不安定であったことから、マトンが脚光を浴びるようになったのです(昭和36年「畜産物の価格安定化に関する法律」が制定された)。以後毎年輸入量が増加し、昭和33年(1958年)の27トンから昭和35年には18、000トンと急増し、昭和43年(1968年)には10万トンを超え、食肉加工原料に占めるマトンの割合は約42%に達し、豚肉をしのぐまでになりました。マトンの使用はプレスハムやソーセージのコストダウンによる消費拡大に大きな役割を果たしました。その後は所得の伸びと共に消費者のニーズは高級な単味品(ロース



ハム、ボンレスハム、ベーコンのように一種類の大きな肉塊から造られる製品へと移行し、昭和46年(1971年)に豚肉の輸入が自由化されたこともあり、食肉加工原料に占めるマトンの割合は漸減し、豚肉がこれに取って代わり、平成13年の原料肉構成割合はマトンが0.7%、豚肉が86.4%、馬肉が0.5%、牛肉が2.9%、鶏肉が9.6%になっており、一時の面影はありません。昭和37年(1962年)JAS格付けが始まり、食肉加工品の品質安定化が図られました。

昭和40年代は、プレスハムとウインナーソーセージの消費が増大し総生産量は約2.2倍に拡大し、各メーカーが業績を伸ばした時期でもあります。一方、昭和44年(1969年)には食肉製器製菓業の資本50%自由化、昭和48年(1973年)には第一次石油ショックによる減益、昭和50年(1975年)には資本の完全自由化が行われましたが、各メーカーが技術革新、合理化、新製品の開発等に努めた結果、50(51)年には再び二桁の伸びを取り戻しました。昭和50年代に入ると、グルメ志向が始まり、量より質が重視されるようになり、高くて品質がよく美味しいものが求められるようになってきました。これを反映してロースハムやベーコンなどの単味品の伸びが顕著となり、プレスハムは減少しましたが、ウインナーソーセージの伸びは著しく、原料肉仕向け割合からみても、雑肉の割合が減少し豚肉の割合の増加から高級化が伺えます(図・食肉加工品生産量の推移、食肉加工品への原料肉仕向け割合の変遷)。しかし、保水力を高め、歩留を向上させて利益を上

げることを目的としてリン酸塩の使用が過多になり、品質の低下が認められるようになったことから、手造り製品が注目されるようになったのもこの時期ではなかったかと思えます。昭和57年には厚生省告示で非加熱食肉製品の規格基準が示され、豚肉塊(内臓を除く)を原料とするもの、すなわち、生ハムの製造が許可され、挽肉製品(生のソーセージ類)は許可されませんでした。従って、それまで製造されていたローストビーフや非加熱のドラインソーセージの製造が出来なくなりました。しかし、10年後の平成5年には再び製造できるようになりましたが、食中毒を回避するために、食品衛生法により、原料肉の選択、凍結肉の使用、解凍法、塩漬の条件、乾燥程度、製品の条件、流通上の管理などについて厳しい規格基準が設けられています。

わが国の食肉加工は、バブル期まで紆余曲折を経ながらも生産量を伸ばしてきましたが、現在ではその消費はほぼ飽和状態に達しており、新しいヒット商品の開発に努力が払われています。

『天草大王のはなし』

家畜繁殖学研究室助教

桑山 岳人

昔々(明治から大正時代にかけて)熊本県の天草地方に、天草大王というそれは大きな鶏がいました。しかし、その鶏は私たちが生まれるずっと以前に絶滅してしまいました。平成に入り世界でも最大級の鶏であるこの天草大王を復元して特産地鶏しようとする事業が熊本県で立ち上がりました。これから披露するのは、その天草大王復元のおはなしです。

天草大王とはどんな鶏か？

天草大王は、明治中期頃、中国から輸入されたランシヤン種を基に、熊本県の天草地方において、肉用種に適するように極めて大型の品種に改良された鶏です。初めはシヤモによく似ていましたが、次第に変化して単冠となり、ランシヤン種に似た体型となりました。羽色は名古屋種に似た猩々色に黒斑が混じった濃猩々色で、体型は名古屋種(♂...3.6kg, ♀...2.7kg)の倍ほどあり、大型の雄は体重6.4kg、6.8kgに達したといわれています。そして名前は、天草の地名とその大きさから『天草大王』と名付けられたものと考えられています。大正時代には、天

草大王を仲買人が買い集め、「博多の水炊き用肉鶏」として出荷されてきました。当初はその味の良さから高値で取引されていましたが、景気の後退とともに、昭和の初期頃にととうと絶滅してしまいました。

天草大王の復元方法(図1)

絶滅した天草大王を復元するため、日本で飼養されなくなっていたランシヤン(写真1)を1992年にアメリカ・アイオワ州のMcMURRY HATCHERYから輸入されました。その数は、無鑑別初生雛の黒色内種50羽と白色内種50羽でしたが、天草大王の復元にはその内、体重の大きい白色内種が用いられました。また、文献等からランシヤンの他に天草大王の成立に関わった鶏種としてシヤモとコーチンが選定されました。シヤモ(写真2)は愛好家から種鶏と種卵を入手し、コーチンは熊本種を基に大型の肉用雄系統として



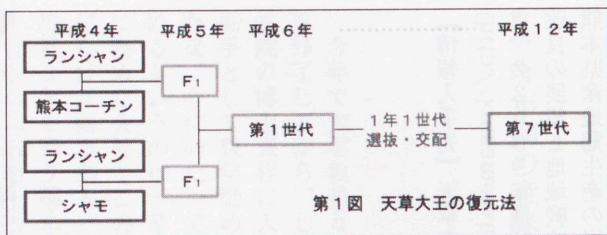
写真1. ランシヤン



写真2. シヤモ



写真3. 熊本コーチン



第1図 天草大王の復元法

造成した熊本コーチン(写真3)が用いられました。

復元された天草大王

復元された天草大王の平均体重(41週齢)は、世代が進むにつれて大きくなり、第7世代(写真4)では雄が5.7kg、雌が4.4kg、雄の中でも最大のもは6.7kg、雌は5.6kgに達し、文献の天草大王に匹敵する大きさになりました。また、羽色においても天草大王特有の濃い猩々色になり、計画していた通りの天草大王ができあがり、

2001年に天草大王復元に関する発表が行われました。

天草大王の肉用生産

肉用鶏の生産は、天草大王の雄と大型で産卵率の高い九州ロード(写真5)の雌を交配しました。九州ロードとは、白色プリマスロック種系統に熊本ロード(ロードアイランドレッド種)を交配した有色大型の

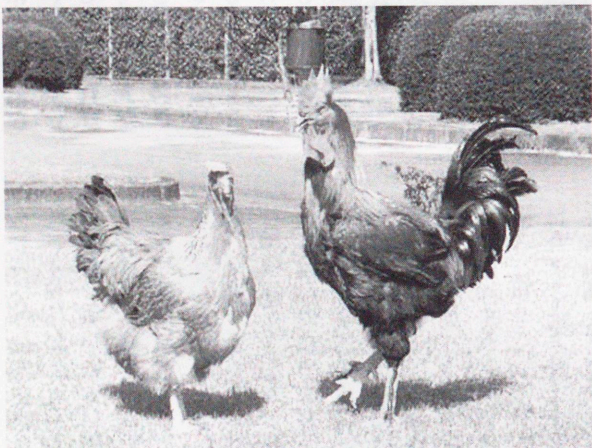


写真4. 復元された天草大王(第7世代)

高品質肉養鶏の母系統として造成した肉用鶏です。現在は、昔どおりに復元した天草大王を『原種天草大王』とし、天草大王と九州ロードを交配した肉用鶏を『天草大王』と区別しています。従って、天草大王の肉および肉製品は天草大王の名称で販売されています。

肉用鶏「天草大王」の生産体制

2003年に、ようやく熊本県内で天草大王の販売が始まりました。出荷羽数も2003年2.5万羽、2004年4.3万羽で2005年には10万羽に達する勢いです。また、2005年には、地鶏肉の特定JAS規格(家禽論で講義)の認定を受めました。今回、日本家畜学会九州東海大2005.11.4(5)に出席した際、熊本市内で天草大王の肉(写真6)を調査し(？)、非常に美味であることがわかりました。ここまで天草大王の復元について説明してきましたが、その復元の中心的な役割を果たしてきたのは本学畜産学科の先輩です。ここ数年、本学畜産学科の先輩の世界に誇れる研究成果をよく耳にしますが、



写真5. 九州ロード

その影には長年に亘る地道な努力があったということはいまでもありません。これからの皆さんには、農大の先輩に負けないよう、世界に誇れる農大オリジナルブランドの作出にもチャレンジしてもらいたいものです。



写真6. 天草大王の水炊き、たたき、すき焼きセット

【情報入手先】天草大王―復元―

(<http://kumanoto.lin.go.jp/tori/fori.htm>)および日本家禽学会2005年度秋季大会「公開シンポジウム」肉用鶏改良の展望と地域戦略」絶滅品種「天草大王」の復元と熊本県産地鶏生産の展開 山下裕昭

3年間の意味と意義

家畜生理学研究室講師

原 ひろみ

今年で大学教員として4年目になる。農大の修士課程を修了してから、しばらく民間企業で働いた後、再度大学院の博士課程に入学し、2年弱で中退した後、そのまま副手として数年勤め、また、企業で派遣社員として働いた後、今にいたっている。私にとって4年間同じ所に勤めるといのは、卒業して20年近く経っているが、最初に勤めた会社とこの農大の2組織である。この間の引越は7回である。私にとつての4年というのは辛抱の境目3年を乗り越えたという大変なことであった。

昔から「石の上にも3年」という言葉があるが、辛抱して継続すれば最終的には物になる例えとして、使われてきた。これに対しあまり良い例として使われない「3日坊主」という言葉がある。何事においても、まず3日、そして3カ月が節目としてあり、その継続の上に3年があり、それは大変大きな力になるということなのだろう。誰が言い始めたのかは解らないが、この「3」という数字はどうやって導き出されたものなのか？日本での教育は、一般に保育園、幼稚園などの3才時からの3年保育で始まって、小学校はその2倍の6年間、中学校、高等

学校は3年間である。その後の短期大学、大学から2年を一節として2年、4年、大学院前期は2年となつて、後期で再度3年と3で区切られる。専門学校も2年間あるいは3年間である。この3年という時間を日本人の平均寿命から考えるとその一生の27分の1、小学校から高校までの12年間では7分の1に相当する。これに加えて大学4年間、社会で生きるための基本的な知識・教養や技術を身につけるのにこれだけの時間がかかるのかと考えると長い気がする。この7分の1と同じくらいの期間を私は農大畜産学科に関わってきた。そのうちの2/3は教えられる側として、残り3分の1を教える側として過ごしてきたが、学ぶという事は「つづ」と続いている。何を追い求めているのか時々解らなくなるが、転職したり、引越したりするのはそこに居ることに疑問が生じるからである。転職の一番の理由は、「つづこべ言わずに仕事しろ」ではないが、これはこういうものだから、あまり考えるなど云われたことだと思ふ。疑問を投げかけてはいけない仕事、職場があるのだ。といっても、幼い頃からすぐなせ、どうしてと訊き続けて、祖父母や両親、親戚、はては小学校の先生までも少し黙っていなさいということがあった私ですぐそれを止めることも出来ず、疑問は膨らむばかりで、仕事の時間に追われるようになり、爆発するまえにある意味逃げ出したに近い。ならば、疑問がなければ仕事が出来ないところ、なぜ、どうしての答えを導きだせる環境を見つけたら良いのだと考え、その環境を手に入れるために多少の努力をした。

そして教員としての4年目であるが学生とのジェネレーションギャップと教えることの難しさにどうしたら伝わるのかを、ギャップはなぜ生じるのか、なぜ伝わらないのかの疑問に答えを出すために多くのことを学生諸君から学んでいる。

大学4年間のうち1・2年は一般教養と専門選択科目と実習とほとんどの科目が4単位、要は通年ものであったので、前期が終わるたびに後期はもう少し頑張ろうと思いつながら過ごしていた。2年次では、専門選択教科が多く、3年で必須科目ばかりであったように記憶している。部活にもサークルにも入らず、教室と図書館に通う日々であった。3年になって家畜生理学研究室に入った。この時生理研の4年生は2名で、休み無く当番をし、2名では動物管理当番は大変なので、院生もやっていたということのを伺い、同期16名は先輩に迷惑をかけないようにと頑張っていた。また、先輩が少ないことから、研究室に入って5月位には先を競うようにそれぞれが4年生、院生について、実験を教わり、実験器具の洗いをした。研究室活動をしながら、やっと2年次で学んだことが理解できるようになった。しかし、1つのことが解ると別の疑問が生じ、解らない事の方が増え続けた。「一つのこと分かるとその先にはそれ以上の分からないことが待っている」と言ったのは動物行動学者のコンラート・ローレンツだったが、その通りである。3年で1・2年次に疑問に思ったことはほんの一部に過ぎず、知らないということを知るとい意味で1つものが見えてくる区

切りであった。4年目は卒論に費やした1年であるが、この疑問(課題)をどのようにして解けばよいのかを渡邊誠喜先生の指導の基、ある時はたった一単語から、ある時は英語論文の解釈の仕方、ノートを見せられて何に見えるかと訊かれたことで学んだ。ノートを観て、ノートですという答えだけでは無いと云うことが強く印象に残った。四角い紙であり、それが束ねられたものであり、時には文字や絵を書き込む事以外に、それらを書く時の下敷きにもなる。ものを知らないというのは強さでもあった。免疫学のほんの一部しか解っていないにもかかわらず、先生に実験結果を見せ、討論する際も本では実験結果と違うが自分に間違いはない。ウズラではそうなのだということのを平気でいっていた。ある意味、その結果に疑問を抱かなかったのである。しかし、修士に進んで、卒業論文を観た時になんと稚推であったのか、どうしてこの点に気づかなかったのかということが、解った。卒論から通して3年目である。あることを理解し、気づき、次に繋げるためにはやはり3年かかるのである。

3年の次はどうしたらよいのか?これが私にはいつも非常に重い。発展させられるのか、踏みとどまって、基礎を築きなおすのか、解らなくてもいいやとなげやりになれば、次に進めてしまえといひ加減なものになってしまふし、基礎を築き直すには今以上に他のことを知らなければならぬ。大人になるにつれ、知らないことを他人に訊くのは恥ずかしいと感じる。まして、疑問をもたずに仕事しろといわれては二一の句が継げない。研究は様々

なことになぜ、どうしてがついて回る、逆に疑問がなければ発展性のない研究になってしまう。自分だけでは、どうしようもないことも多々ある。未だに、学生の頃からお世話になっている先生方に質問してもいいですか?教えて下さい、と訊いている。もしかしたらちゃんと勉強したかと思っている先生もいらつしやるかもしれないが構わず訊いてしまう。この環境にあるから、4年目の農大畜産学科教員として迎えることができた。次の節目は、疑問が増え、今以上に簡単に解けないことであるとすると3年(基礎)+2年(応用)と考えれば、5年単位になつていくのかもしれない。

辛抱するというより、今は楽しんでいる。好きなことを続けるのに付随する様々なことに疑問を持ちながらも如何に対処していくかが次の節目までの課題である。

集う学友

『時の鏡』

畜産学科 4年

鈴木 眞樹人

四年間という大学生活、そして経験は、まさに将来の鏡だ。

四月から社会人として社会に出て行くことになるわけだがここに来て思うことがいくつもある。

サークル活動、研究室活動、私生活。どれも充実した時間を送れたわけではない。むしろ反省点の方が多いのかも知れない。その中で全てに共通して言えることは、多くの友人に出会えたこと、多くの人に出会えたこと。大学四年間は、多くの友人、多くの人と出会える大きな機会。多くの友人、多くの人と出会い、話したことで自分を成長させることができたように感じる。

後輩から学ぶこと、先輩から学ぶこと、同級生に学ぶこと、先生方から学ぶこと。大学とは学習をするためだけの場所ではなく他にも学ぶことは沢山ある。もちろん私達は大学という教育機関で学習をしている以上、勉学に励むことが一番にあるということは忘れてはいけない。そのことを忘れずに、よく遊び、様々な人間と関っていくことでそういう経験を積んでいくことも大学では重要なんだと思う。

その中で必ず将来に役立つ経験が幾つもあることは確かだ。そしてその経験が同時に将来の自分のステータスとなり、将来の姿を映す鏡となる。つまり、大学で送る四年間という時間は将来の自分の姿を映す「時の鏡」だったように私は思う。

夕暮れが好き

畜産学科 3年

須田 洋史

逢魔が時という写真集を見つけて、数ページ開いたら衝動買いしてしまった。

この写真集は、写真と文章で構成されていて、その中こんな一節がある。

「一日は日暮れに始まり、日暮れに終わる。」

今だからこそ不自然に思うけど、昔の考えの方がメリハリのある自然な考え方だと思う。

真夜中の午前0時、誰もが寝静まった頃ひっそりと一日が終わり、一日が始まる。

これよりも、真っ白だった太陽が真っ赤になり、青空さえも赤く染まり、影が長く伸びる頃、その光景を見て「今日も一日が終わる」と感じる。さらに長く影が伸びて暗闇と同化したとき、一日が終わり、月が出て星が出たと同時に一日が始まる。そして、今日も良い一日でありますようにと願い、床に就く。

単純だけど、素晴らしい。

夕暮れが好きになったのは中学校に行き始めてからだ。

小学校へは徒歩で通っていたが、中学校では自転車で通うようになった。

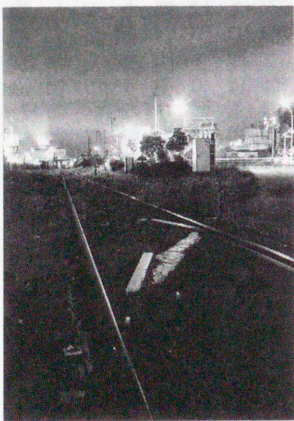
そして、学校から帰る途中、真っ直ぐ続く道のずっと先に山があり、その稜線に赤と白でペイントされた大きな鉄塔があった。この鉄塔は沈みかけた太陽によって黄色に輝く。

その姿があまりにも綺麗でベダルに力が入る。しかし、五分程度しか続かないこの現象は、中学時代の三年間で見られた回数は数えるほどしかない。

橋を渡り、角を曲がったその先に見られるのか見られないのか、この瞬間のドキドキは今でも忘れない。

大学生になり、写真に興味を持ち写真部に入部した。逢魔が時という写真集に出会ってから一年余りだったが、なかなか良い夕暮れに逢えない。

でも、夕暮れ以上の素晴らしいもの、凄まじいものに出会えた。大学は面白い。



子供のよう

畜産学科 2年

上開地 広美

私は生き物が小さい時から好きで、その中でも特に野生動物に興味があつて農大に入りました。高校までの友達には動物が好きでも学問として学ぶ人は殆んどいませんでしたが、やはり大学となると動物好きの度合も人数もかなり濃くなります。一般的なレベルからマニアックな人までいろいろです。今までできなかった深い所の話をしたり聞いたりして、異様なテンションが上がります。みんな変わり者です。

野生動物学研究室は畜産学科にあるので授業は野生動物の事だけではなく、牛、豚、鶏、綿山羊、その飼養、繁殖なども学び、実習もあります。直接関係のない勉強もありますが自分達の食に関わる大事な授業で、知っている価値は十分にあります。また、私はファームングというサークルに入っています。活動内容は農家に実習に行く事と、自分で野菜を作る事。長期休学の時には、北は北海道、南は沖縄まで赴き、汗水垂らして泊り込みで働きます。お客ではなく勉強させて頂くわけで、みんな一生懸命に取り組み、大変だけれども充実した時をみんなと過ごします。

一年を終えて

畜産学科 1年

大竹 彩乃

私がこの大学に入ったとき四年間は長いと思つていましたが、あつという間に一年が過ぎました。この一年の中で印象に残つたことは三つあります。

まず一つ目は、サークルです。私はバレーボールをやつていたので大学に入つても続けようと思ひ、バレーボールサークルに入りました。サークルでは畜産だけでなく農学の友達ができ、先輩とも仲良くなることができました。その中で練習するバレーボールはとても楽しかったです。特に同年の女子がほとんど経験者だったので、セッターと速攻を合わせ本気で打ち合いをすることができ、練習に力が入りました。そして大会にも出ました。あと、夏休みにあつた夏合宿も印象に残りました。合宿二日目の練習は、合宿中一番きつい練習で私の中で忘れられない思い出となりました。

二つ目は富士農場での実習です。実習は三泊四日で行われたのですが、私は農場に行くのは初めてだったのでこの実習はとても楽しかったです。で実際にやってみると大変でした。朝早くから起き、牛舎の掃除などを行いました。あと、牛、豚、鶏のスケッチと、毎晩あつたレポ

私と同じ野生動物の友達とは、野生動物保護センターにボランティアとして動物の世話をさせてもらいました。春は特に野鳥の雛が多くて、ツバメ、ムクドリ、カラス、スズメ、フクロウなど様々な種類が運び込まれ、保育園状態です。慣れた雛は餌やりの時、自分から口を開いてくれますが、来たばかりの雛は口を開けようとしませんが、職員の方はさすがプロの手つきで次々と餌をやっていきます。ここでは他にも傷ついた動物のリハビリや、足の動かなくなった動物の面倒もみていて勉強になります。またボランティア繋がりで、ハクセキレイのバンドリングの手伝いもしました。バンドリングとは野鳥を捕まえ、雌雄、幼鳥か成鳥か調べ、足輪をつける作業です。また他の繋がりで、NPOの環境教育の集まりにも参加させてもらい、人の輪が広がりました。

そんな生活をしていて、ふと振り返ってみると、土日祝日も大学やどこかしら出かけていました。通学時間が私の場合、三時間弱かかるわけですから、ほぼ毎日五時起きで、友達からよく体力もつねと言われます。私は体力もないし、朝に強くもないです。きつと子供なんだと思います。いくら遊んでも遊び足りない子供です。これからも何事にも興味を持って楽しめる子供でありたいと思います。

1トはとても大変で、特に鶏のスケッチが困難を要しました。実習中で牛の手綱引きがあつたのですがこれはできてともうれしかったです。

最後に勉強です。大学の授業は思っていたよりおもしろく、専門的なことなどが学べました。しかし、おもしろいばかりでなく大変だったこともありました。それは試験です。私は苦手な教科が多くあつたので、試験前に先輩や友達と一緒に勉強をしました。しかし、成績は良くないものがありました。だから二年では授業をもっと真剣に聞き、計画的に勉強をして余裕を持って試験に臨みたいと思ひました。

平成16年度収支決算報告

平成16年6月1日～平成17年5月31日

一般会計の部

収入の部

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考
会 費				
新 入 生	2,000,000	950,000	1,050,000	10,000円×95名
編 入 生	92,500	15,000	77,500	5,000円×3名
過年度分	2,070,000	20,000	2,050,000	10,000円×2名
雑 取 入	0	24,000	△24,000	※1)
当期収入合計(A)	4,162,500	1,009,000	3,153,500	
前期繰越収支差額	1,192,223	1,192,223	0	
収入合計(B)	5,354,723	2,201,223	3,153,500	

※1) 新入生歓迎会、本部開き、慰労会の際に先生方から徴収した金額を、雑収入として計上した内訳は以下のとおり。

平成16年度 本部開き	先生10名より各1,000円	計10,000円
慰労会	先生11名より各1,000円	計11,000円
平成17年度 新入生歓迎会	先生3名より各1,000円	計3,000円
		計24,000円

支出の部

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	差 額	備 考
収 穫 祭 援 助 費	700,000	700,000	0	特別会計へ
ふじみの印刷費	430,000	428,610	1,390	1,300部発行
卒 業 祝 賀 会 費	200,000	130,750	69,250	
卒 業 記 念 品 費	400,000	169,995	230,005	260個製作
新 入 生 歓 迎 会 費	150,000	134,695	15,305	
消 耗 品 費	50,000	1,089	48,911	
通 信 運 搬 費	150,000	1,980	148,020	※2)
雑 費	70,000	33,839	36,161	
予 備 費	230,000	0	230,000	
当期支出合計(C)	2,380,000	1,600,958	779,042	
当期収支差額(A)-(C)	1,782,500	△591,958	2,374,458	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,974,723	600,265	2,374,458	

※2) 本年度、畜友会費納入のお願いを発送するのが遅れてしまい、発送に用いた金額は来年度へ持ち越しとなります。

残高証明 郵便局	¥601,717 ※3)
三井住友銀行	¥174,199 ※4)
合計	¥775,916

※3) 本来郵便局から引き落とし一般会計予算の¥36,908を特別会計から引き落とししたため、一般決算報告書では一般会計預金残高(¥601,717)より少ない金額(¥576,265+¥24,000)が記載されています。

$$601,717円 - 36,908円 + 11,456円(三井住友銀行中の前年度残高) + 24,000円(※1) = ¥576,265 + 24,000$$

※4) ※3)の金額を特別会計より引き落とししてしまったために特別会計報告書では、特別会計預金残高(¥174,199)より多い金額(¥199,651)が記載されています。

$$174,199円 + 36,908円 - 11,456円(三井住友銀行中の前年度残高) = ¥199,651$$

平成17年度畜友会事業報告

平成17年6月1日～平成18年5月31日

畜友会だより

平成17年

- 7月21日 1年生対象収穫祭説明会(授業終了後)
- 7月27日 平成17年度畜友会定期総会(於 トリニティホール)
- 10月7日 第6回厚木キャンパス収穫祭 及び
第114回体育祭畜産学科統一本部本部開き
(於 食堂・けやき)
- 10月28日 第6回厚木キャンパス収穫祭前夜祭参加
- 10月29日 第6回厚木キャンパス収穫祭参加
～30日 (家畜苑、研究棟アート、特別企画、宣伝隊)
- 10月31日 第114回体育祭参加(於 世田谷キャンパス)
- 11月25日 第6回厚木キャンパス収穫祭 及び
第114回体育祭畜産学科統一本部慰労会
(於 食堂・けやき)
- 12月12日 厚木キャンパス後期スポーツ大会参加
～15日
- 平成18年
- 3月20日 畜友会誌「ふじみの」42号発行
- 3月21日 卒業祝賀会・卒業記念品贈呈
- 4月上旬 新入生学外オリエンテーション参加(於 富士畜産農場)
- 4月下旬 新入生歓迎会(於 食堂・けやき)

平成17年度畜友会予算

平成17年6月1日～平成18年5月31日

一般会計予算(案)

収入の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考	
会 費	新 入 生	1,800,000	2,000,000	△200,000	
	編 入 生	127,500	92,500	35,000	※1)
	未 取 分	3,177,500	2,070,000	1,107,500	※2)
雑 収 入	10		10		
当期収入合計(A)	5,105,010	4,162,500	942,510		
前期繰越収支差額	600,265	1,192,223	△591,958		
収 入 合 計 (B)	5,705,275	5,354,723	350,552		

※1) 編入生 2年生……7,500円×1人
3年生……5,000円×15人
4年生……5,000円×9人

※2) 1年生……10,000円×223人
2年生……10,000円×59人
3年生……10,000円×20人
4年生……10,000円×23人 計325人

支出の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額	備 考
収 穫 祭 援 助 費	700,000	700,000	0	
ふじみの印刷費	430,000	430,000	0	
卒 業 祝 賀 会 費	200,000	200,000	0	
卒 業 記 念 品 費	400,000	400,000	0	
新 入 生 歓 迎 会 費	150,000	150,000	0	
消 耗 品 費	30,000	50,000	△20,000	※3)
通 信 運 搬 費	150,000	150,000	0	
雑 費	70,000	70,000	0	
予 備 費	230,000	230,000	0	
当期支出合計(C)	2,360,000	2,380,000	△20,000	
当期収支差額(A)-(C)	2,745,010	1,782,500	962,510	
次期繰越収支差額(B)-(C)	3,345,275	2,974,723	370,552	

※3) 消耗品費は、平成16年度収支決算報告より、消耗品費にゆとりがあるため減らしました。

特別会計収支決算報告

平成16年6月1日～平成17年5月31日

第5回厚木キャンパス収穫祭

収入の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額
一 般 会 計 よ り	700,000	700,000	0
雑 収 入	0	6	△6
当期収入合計(A)	700,000	700,006	△6
前期繰越収支差額	251,545	251,545	0
収 入 合 計 (B)	951,545	951,551	△6

支出の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 額
統 一 本 部	400,000	390,075	9,925
特 別 企 画	0	0	0
体 育 祭	70,000	61,678	8,322
宣 伝 隊	150,000	140,840	9,160
装 飾	50,000	47,627	2,373
家 畜 苑	130,000	111,680	18,320
予 備 費	45,000	0	45,000
当期支出合計(C)	845,000	751,900	93,100
当期収支(A)-(C)	△145,000	△51,894	△93,106
次期繰越収支差額(B)-(C)	106,545	199,651	△93,106

上記のとおり報告する。
平成17年10月12日

畜友会会長 栗原良雄 ㊟

上記に相違ないことを認める。
平成17年10月12日

平成16年畜友会監査委員

松岡昭善 門司恭典
三浦隆雄 金井俊憲

監査報告書

畜友会会則第9章、第29条及び30条の規定に基づいて平成17年10月12日に平成16年度業務及び会計監査を実施致しました。

事業報告書、会計諸帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

平成17年度畜友会役員

平成17年6月1日～平成18年5月31日

役職	氏名	研究室
会長	栗原良雄	家畜飼養学研究室
副会長	吉田豊	家畜生理学研究室
副会長	花田博文	家畜育種学研究室

・執行委員

委員長	3年 小林大樹	家畜育種学研究室
副委員長	3年 原真樹子	野生動物学研究室
	2年 須藤真史	
書記	3年 菅澤奈充子	家畜衛生学研究室
	2年 神蔵美穂	
会計	3年 林亜希子	野生動物学研究室
	2年 増田翔	
渉外	3年 野田ちか	家畜衛生学研究室
	2年 高野大智	
企画	3年 鈴木瑞穂	畜産物利用学研究室
	2年 長壁治弘	
庶務	3年 坂口陽祐	家畜繁殖学研究室
	2年 相馬雄介	
編集	3年 関綾乃	家畜繁殖学研究室
	2年 谷口絵梨	
監事	松岡昭喜	畜産物利用学研究室
	門司恭典	家畜繁殖学研究室
	3年 金井俊憲	家畜繁殖学研究室
	2年 西岡莊平	

特別会計予算

平成17年6月1日～平成18年5月31日

第6回厚木キャンパス収穫祭

畜友会援助費

収入の部 (単位:円)			
科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より	700,000	700,000	0
雑収入	10		*1) 10
畜産学科助成金			
当期収入合計(A)	700,010	700,000	10
前期繰越収支差額	199,651	251,545	△51,894
収入合計(B)	899,661	951,545	△51,884

*1) 雑収入は、平成16年度決算の利子が¥6であったためです。

支出の部 (単位:円)			
科目	予算額	前年度予算額	差額
統一本部	400,000	400,000	0
特別企画	0	0	0
体育祭	70,000	70,000	0
宣伝隊	150,000	150,000	0
装飾	50,000	50,000	0
家畜苑	130,000	130,000	0
予備費	45,000	45,000	0
当期支出合計(C)	845,000	845,000	0
当期収支差額(A)-(C)	△144,990	△145,000	10
次期繰越収支差額(B)-(C)	54,661	106,545	△51,884

農友会厚木支部助成金

収入の部 (単位:円)			
科目	予算額	前年度予算額	差額
一般会計より			
雑収入			
畜産学科助成金	1,610,000	1,610,000	0
当期収入合計(A)	1,610,000	1,610,000	0
前期繰越収支差額			
収入合計(B)			

内訳 (単位:円)			
科目	第6回予算	第5回予算	差額
学科助成金	計610,000	計630,000	△20,000
神輿代	130,000	130,000	0
パネル代	100,000	100,000	0
応援合戦衣装代	60,000	60,000	0
事務費	20,000	20,000	0
記録費	50,000	30,000	20,000
交通費	250,000	290,000	△40,000
学内装飾費	計150,000	計180,000	△30,000
家畜苑費	計850,000	計800,000	50,000
銅管代	210,000	160,000	50,000
運搬代	380,000	380,000	0
装飾代	260,000	260,000	0
合計	1,610,000	1,610,000	0

第八回厚木キャンパス収穫祭・第一一四回体育祭 事業報告及び結果報告

【事業報告】統一本部

畜産学科統一本部の第6回収穫祭での活動は、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭を行いました。統一本部(委員長、副委員長)の活動は先生方との連絡をとり、畜産学科統一本部の各部門及び第6回厚木キャンパス収穫祭実行本部、農学科統一本部、そして世田谷キャンパス13学科統一本部との連絡を取り、また畜産学科統一本部をまとめ6回目となる厚木キャンパス収穫祭、第114回体育祭を成功させようと一生懸命努力しました。

本年度の収穫祭初日は、曇りの中無事開会式を外で迎えられました。しかし途中で雨が降りはじめ、ステージ企画は体育館に移動してしまいました。

しかし2日目は晴天となり昨午を越える来客者を数え、これも、学校全体と皆様のご協力のもと無事に成功させることが出来ました。

来年度は第7回を迎えるに当たり、先輩方から受け継いだものを生かし、新メンバーで大きな目標に向かって一致団結し、一生懸命がんばっていきましょう。



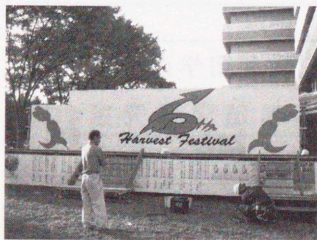
特別企画



今年も多くの学生や地域の方々に参加し、楽しんでいただけた様々なステージを特別企画が一丸となり作りあげました。今回の収穫祭では、学生が企画した「dance and fashion」のショーや、農大ならではの企画「知識の泉」ではチーズを作るなどの第6回収穫祭ならではの新しい企画が生まれました。

そして、今年恒例の「陽気な牧場の歌謡祭」に加えそこから生まれた企画「集えパフォーマー」では、一般の方々や学生が美しい歌声やダンスなどを披露してくれ、子供に人気の「バルーン教室」や家族が1つとなる「幸せ家族計画」、農大らしさをテーマとした〇×クイズ「グッチョイ バッチョイ」などでは学生や多くの来場者に参加していただきました。

また、学生メインの企画では、サークル対抗ゲーム「Fight all TUA」、農大のミス&ミスターを決める「美農祭」や奇麗な男性を決める女装コンテスト「BIDAN」では大盛り上がりを見せられました。



宣伝隊

東京農業大学といえば、世間一般の人は「農大って世田谷のほうにあったよね。」と話されることが多い中、厚木にもキャンパスがあり、収穫祭が行われている事を知って足を運んでいただくために、今年も宣伝活動を行ってきました。

宣伝活動では、大根と鮎がプリントされた浴衣を着て、エンジ色の法被を羽織り、足袋と雪駄を履いて、みんなで声を張り上げて収穫祭を宣伝します。8月のDANBEパレードでは、厚木で作られた独自の団扇を配布し、農大名物である青山ほとりを踊り、厚木の街に収穫祭をアピールします。9月下旬から収穫祭までの土日には、本厚木駅や海老名駅、相模大野駅までの各駅、また、厚木市内の公園や各地のお祭りに行き、収穫祭宣伝のビラ、種付きビラ、ポストカード付きビラ、風船、野菜を笑顔いっぱい配布し、全学応援団によるリーダー公開を行ってきました。9月下旬から作り始めた畜産学科伝統の神輿は、10月の厚木パレードには出す事ができませんでしたが、体育祭の神輿順位では、見事に第四位という成績をおさめました。また、練馬祭りでは世田谷と協力し、収穫祭の宣伝をしました。そして収穫祭当日は、ちびっ子お絵かきコンテスト、野菜の無料配布を行う等の活動の結果、今年も昨年以上の3万5千人もの来場の方々を迎えることができました。



体育祭

体育祭は、毎年収穫祭の後に世田谷キャンパスで行われ、競技は15学科対抗の玉入れ、綱引き、大玉転がしなど様々な競技を行います。各学科の学生は、これらに参加し楽しく盛り上がり指しています。そして、「他学科に負けない」と常に1位を目指しています。しかし、その夢は今年も叶えられませんでした。でも、総合第3位という、上位のランクに入りました。

また競技の部に他に応援の部というものがあり、これは、各学科で応援合戦を考え、互いの学科を応援し合うものです。これも学科対抗競技の一部で、畜産学科は特に力を入れ、本番に向けて毎日練習しています。応援合戦は体育祭の目玉の一つと言えるでしょう。今年の畜産の応援合戦は、例年の「空手」スタイルをなくし、「ヨサコイ」スタイルでいきました。テーマは「笑顔」でした。この踊りに先生方から「良かった」という言葉をいただきました。私たち統一本部一同もとても感動し、良い思い出が残せたと思います。

今年も、昨年よりも順位が一つ下がってしまいましたが、素晴らしい戦いができたと思います。来年は、それ以上に良い戦い、思い出ができるでしょう。



櫓装飾

「櫓」は世田谷キャンパスで行われる体育祭で各学科の応援席となる高さ約5m50cm横幅約9mの巨大な作品です。本年度、畜産学科の櫓は「孔雀」です。本体・羽を立体とし、その羽を広げた優雅で迫力ある姿に仕上げることでできました。また、色を塗り合わせ鮮やかになるよう色彩にもこだわりました。さらに、応援席の下は「畜産楽華（ちくさんがか）」という四文字熟語で飾られてその両脇に孔雀が描かれています。

この作品はみんなの力に支えられ助けられて完成する。ここで、その結果櫓装飾の部で15学科中5位という成績を収めることができました。



研究棟アート

研究棟アート、それは研究棟から東京農業大学収穫祭の成功を祈り、多くの人に収穫祭に来てもらうために掲げる装飾絵画のことです。研究等の壁一面を覆うほど巨大なこの絵は、たくさんの白い布で繋ぎ合わされています。その大きさは厚木市文化会館からでも確認できるほどです。この絵を見れば、一目で農大の収穫祭が間近であることを感じ取ってもらえることと思います。

今年の作品の1つは風神様。厚木キャンパスを農大収穫祭という風によって、より活気のあるものにして行こう！という願いをこめて書き上げ、もう1つは収穫祭の宣伝文として掲げさせていただきました。

この絵に使われた布は約14平方メートル。11本の布を繋ぎ合わせてこれだけの大きさにしました。この絵にはみんなの手を繋ぎあい、収穫祭を成功に導こうという思いも含まれています。

作業は9月半ばから開始し、10月半ばごろからペンキ塗りの作業を始めました。多くの人々による御協力の末、完成に至り、前夜祭前日には研究棟から無事二つの作品を並べ、皆様の目に届けることができました。

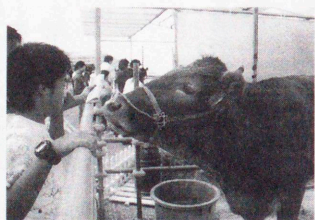


家畜苑

家畜苑とは、動物園ではなく、私達人間が普段当たり前のように食べている肉は今、目の前にいる動物たちの命と引き換えに提供されている、そのことを理解していただく場である。

簡単なようだが、これが難しい。来場者の方々には家畜苑に展示されている牛や豚、ヤギ、羊などをどうしても経済動物である「家畜」ではなく可愛らしい「動物」としてしか見てもらえない。この対策として、展示している家畜それぞれに、その家畜の原種から現在に至るまでの品種改良の過程や出荷までの期間など、経済動物であるという事をより意識してもらえらるような内容の資料を展示した。また、鶏の孵化の展示や、ヒヨコを手にとってもらう事により、命の誕生というものを感じてもらえるようにした。

今回家畜苑に来場した方々の多くが、その意図を理解し、家畜というものに対して考えてくれたように思う。そして、家畜の命と引き換えに得た食べ物を無駄にしないようにしてくれる事を願うばかりである。



【結果発表】

体育祭

総合順位	第3位
競技の部	第3位
大玉転がし	第2位
先生頑張って	第3位
各学科対抗リレー(女子の部)	第1位
櫓装飾の部	第5位
応援の部	第4位
神輿の部	第4位

東京農業大学農学部畜産学科

“畜友会”会則

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。
- 第二条 本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。
- 第三条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章 業務

- 第四条 本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。
 - (1) 会員相互の親睦
 - (2) 講習会、研修会及び研究会発表の開催
 - (3) 機関紙「ふじみの」の発刊
 - (4) 大学行事(収穫祭等)への参加
 - (5) その他第三条に付帯する業務

第三章 会員及び役員

- 第五条 本会の会員は次の通りとする。
 - (1) 正会員 畜産学科の学生
 - (2) 特別会員 畜産学科教職員ならびに大学院生

第六条

(3) 名誉会員 役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。
 本会は次の役員を置く。

(1) 会長	1名
(2) 副会長	2名
(3) 執行委員	
委員長	1名
副委員長	2名
書記	2名
会計	2名
渉外	2名
企画	2名
庶務	2名
編集	2名
監事	4名

第七条

(1) 会長は会を代表し、会務を総理する。
 副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理とする。
 また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
 (2) 委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。
 副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条

(1) 本会には連絡委員を置く。

(2) 連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条

役員および連絡委員の選出および任期

(1) 会長は畜産学科長がこの任にあたる。

副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2) 執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。

尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3) 執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4) 連絡委員は、各学科(1、2年次)および各研究室(3、4年次)で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

第十条

(1) 総会は定期総会とする。

(2) 総会は正会員および特別会員を持つて構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3) 定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4) 臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条

総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条

(1) 総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。

(2) 委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。

委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の五分の一を上限とする。

(3) 委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条

定期総会は次の事項を決議する。

① 前年度の事業報告および収支決算報告

② 次年度の役員

③ 次年度の事業計画および収支予算

④ 会則の改正

⑤ その他

第十四条

総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条

議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条

総会の議決は出席者の過半数によつて議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条

総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者は委任状は含まない。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八条

(1) 第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2) 会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することができる。

第十九条

執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条

執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条

執行委員会で議決された事項について、委員

第二十二条

長は会長および副会長に文章で必ず報告する。連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

(1) 連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2) 連絡委員会は次の事項を処理する。

① 執行委員会で決定した事項の伝達。

② 一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3) 連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することができる。

第二十三条

本会の事業年度および会計年度は六月一日に始まり、翌年の五月末日までとする。

第六章 会計

第二十四条

本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以つてこれにあてる。

但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条

(1) 会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

第八条

(1) 本会には連絡委員を置く。

(2) 連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条

役員および連絡委員の選出および任期

(1) 会長は畜産学科長がこの任にあたる。

副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2) 執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。

尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事は他の役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3) 執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4) 連絡委員は、各学科(1、2年次)および各研究室(3、4年次)で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章 総会

第十条

(1) 総会は定期総会とする。

(2) 総会は正会員および特別会員を持つて構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3) 定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4) 臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の四分の一以上の同意を得て開催目的および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条

総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条

(1) 総会は正会員および特別会員の四分の一以上の出席により成立する。

(2) 委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。

委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の五分の一を上限とする。

(3) 委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条

定期総会は次の事項を決議する。

① 前年度の事業報告および収支決算報告

② 次年度の役員

③ 次年度の事業計画および収支予算

④ 会則の改正

⑤ その他

第十四条

総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条

議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条

総会の議決は出席者の過半数によつて議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条

総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者は委任状は含まない。

第五章 執行委員会および連絡委員会

第十八条

(1) 第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2) 会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することができる。

第十九条

執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条

執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条

執行委員会で議決された事項について、委員

第二十六条 (2)会費は会長および委員長連名で毎年3月に入学対象者に対して請求するものとする。本会の会計は、所定の形式に従って処理し、決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章 機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条 (1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。
(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。
(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。
(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章 大学行事への参加

第二十八条 (1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。
(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。尚、内規は別に定める。
(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章 監査

第二十九条 監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。
第三十条 監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認められた場合は臨時監査することができる。

第十章 付則

第三十一条 本規定の最終解釈は役員会で行う。
第三十二条 本会則は前規約を改正し、平成一〇年二月二〇日よりこれを試行する。

畜友会収穫祭内規

第一章 目的

第一条 本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。
第二条 収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条および第9条に基づく収穫祭に参加する。

第二章 組織および役員

第三条 収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。
1、統一本部
2、宣伝隊実行本部
3、特別企画実行本部
4、学内装飾実行本部
5、家畜苑実行本部
6、体育祭実行本部
第四条 実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

会長	1名
副会長	2名
統一本部顧問	若干名

第六条

(1)会長は会務を統括する。副会長は会長を補助し、会長に事故があるときはこれを代理する。
(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

第五条

統一本部委員長	1名
統一本部副委員長	1名
統一本部会計	1名
各実行本部顧問	若干名
各実行本部責任者	各1名
各実行本部副責任者	各1名
各実行本部会計	各1名

(1)会長は畜友会会長がこれにあたる。副会長は畜友会副会長がこれにあたる。
(2)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より会長がこれを委嘱する。
(3)統一本部委員長は畜友会執行委員がこれにあたる。統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、会長および各実行本部顧問の了承を得てから委嘱する。

- (3) 統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者として協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。
- (4) 各実行本部責任者は各実行本部の運営を担当する。各実行本部副責任者は各実行本部責任者を補佐すると共に各実行本部担当者として協力して円滑な運営・実施にあたる。

第七 条

実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。

- (1) 6本部会議は会長、副会長、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部会計ならびに各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部会計で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。
- (2) 各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部責任者、各実行本部副責任者および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部責任者がこれを務める。

第三章 会計

第八 条 収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭

各部門委員長より

FINISH OFF

統一本部委員長

3年 小林 大樹

自分が、畜産学科統一本部に入り3年間が経ち、もうバトンタッチです。この3年間といっても活動期間はごく僅かではありますが、普通に何もせずに大学生活を過ごしていたら味わうことの出来ないような夢のように充実した期間でした。

最初、副統になった時はある程度の覚悟はしてはいましたが、目に見えないプレッシャーというものに押し潰されそうになり何度も辞めたいと思った日はあり、何をすることも自分の行動に自信もなく優柔不断で、同級生を引っ張ることも、まとめる事も出来ずの日々でした。でも先輩や同級生、後輩達のおかげで自分は成長することが出来ました。

そんなこんなで気づいてみれば、自分が統一委員長として収穫祭に参加していました。

この農大の収穫祭とは統一本部・実行委員会・研究室・サークルだけで盛り上げて作っていくのではなく、有志や農友会などの様々な人達によって作り上げていくものなのだと思う。

援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金な

らびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九 条 予算は畜友会執行委員会で編成し畜友会定期総会で承認を得る。

第十 条 会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」

によって処理する。

第十一 条 決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章 付 則

第十二 条 本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会に諮った後、畜友会定期総会で承認を得る。

第十三 条 本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。



そして、この収穫祭期間はとても濃密で、早く過ぎ行く日々で1日が終わっていくのが、楽しいのだけれど終わらなければと思う寂しい気持ちで複雑でした。毎日毎日終夜などを過ごしこの統一のみんなと過ごしてきた日々、ケンカになったり、寝不足でイライラしたり、くだらない話で大笑いしたりと、思い出深い日々です。

自分にとつての最大の貴重な体験は、

「ゆっこ、みずほ、あやの、金井、なみこ、まき、あっこ、のだちか、ようすけ、ダバ、みーこ」

そして、2年生、1年生の最高のメンバーと最高の日々を過ごした事です。

最初にも言いましたが、もうバトンタッチなので7回、8回とどのような収穫祭を作り上げていき、どのような統一本部を作っていくか楽しみです。

最後になりましたが、自分を支えてくれた3年、2年、1年生ありがとう。また、先輩、先生をはじめ畜産学科統一本部にご協力頂いたすべての皆様に感謝いたします。

ENJOY IT!!

特別企画委員長

3年 脇田 友紀子

毎日が忙しいながらも充実していて、とても長いようで短い収穫祭期間が終わってしまい、とても寂しいような気がしています。収穫祭が終わってから今日まであつという間に過ぎてしまい、収穫祭がとても懐かしく感じています。初めて第6回収穫祭特別企画本部のメンバーで会議をしたのは約1年前でした。ほとんどの部門が活動を始めていない頃から第6回収穫祭特別企画本部は始動していました。今年の2年生は初めての男の子だけの代となって、私自身どのように接していけばいいのか、どんな風に教えていけばいいのかを模索していた頃が懐かしいです。私が先輩から法被を受け継いだ時に想像していた収穫祭よりも何倍も何十倍も楽しくて、充実した収穫祭を作り上げることが出来たって思っています。ありがとうございます。そして自分を支えてくれた全ての人、本当に感謝しています。そして何より鈴木瑞穂、福山裕士、相馬雄介、このメンバーでステージを作り上げることができたこと、きつと一生忘れることの出来ない思い出になったと思います。自分勝手に頼りない委員長だったけど、最後までついてきてくれてありがとうございます。

「トッキーズ」として新しく入ってきた2年生はとても心配でたまりませんでした。それは、2年生の時の自分と鈴木を見ていたように思っています。そんな二人が日に日に成長していくの

宣伝隊の道を選んで

宣伝隊長

3年 関 綾乃

「畜産学科統一本部宣伝隊」。それは、大学生になった私が今日までに一番夢中になって取り組んだものです。

宣伝隊。その名の通り宣伝をする団体です。農大のマークと大根・鮎模様の宣伝浴衣・エンジの宣伝法被・足には白足袋という宣伝隊特有の衣装のかっこよさ、またそれらを着て楽しそうに宣伝活動をする先輩達の姿に憧れ宣伝活動に参加しました。

私は農大の収穫祭が好きです。皆と一緒に収穫祭を作ることが大好きです。農大生一人一人が作り上げた農大製のお祭りを、一人でも多くの方に伝えるために活動する宣伝隊に吸い込まれるようにのめり込んでいきました。

野菜の無料配布はおばちゃんとの戦い。リーダー公開は通行人との戦い。風船配りは子どもとの戦い。ピラ配りはその辺の啓発品配布人との戦い。

宣伝活動をするまでには、配布するものや活動場所などについて毎週会議を何度か何回も意見の交換をしました。どんなピラにしようか。文字は？イラストは？コメントは？ピラに何を付けようか。種は？ボールペンは？ポストカードは？クリアファイルは？風船はどんな柄にしようか。文字？ホルスタイン模様？農大？どこで配ろうか。

を母親のような気持ちになって喜びを感じていました。そして、第6回収穫祭が無事に終えることができたのは今年のメンバーが頑張った証だと思っています。さらに、過去から未来へ特企を伝えることができても幸せに感じています。特企は特にだけど、収穫祭とは人との繋がりを学び、感じる事ができる大事なイベントだと思っています。農学科と総務、そして周りで助けてくれた人に感謝を忘れないようにしていってほしいです。

福山裕士、相馬雄介へ。2人には本当に感謝しているよ！二人が居るだけで空気が和んだし、本当に楽しい時間を過ごす事ができたよ。今年の「自信」と「悔しさ」を忘れずに、自分の作り上げた形を追求、実現していき、3年生として特企を引っ張っていかって下さい。そして自分の「プライド」を持ち、すてきな収穫祭を作ってください。楽しみにしています。

鈴木瑞穂へ。本当にわがままで自分勝手な私に付き合ってくれて本当にありがとうございます。瑞穂でなかったら私は辞めていたと思います。こんな私の扱いや、気持ちが一番理解して分かってくれて感謝しています。瑞穂と一緒に組んで良かったよ!!

最後になりましたが、第6回収穫祭特別企画本部を支えて頂いた参与の先生方、並びに収穫祭実行各本部、農友会各部の皆さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。



駅・公園・お祭り会場・キャンパス内。少しでも多くの人に手にとってもらえるように、読んでもらえるように、来てもらえるようにと考えることが多く、話し合いは毎回深夜を通り過ぎた日、また次の日と終わることがあります。ケヤキ内でのビデオ上映を1週間続けて行ったり、2年生の斬新なアイデアで宣伝マンにふんしての宣伝活動も行いました。普段の活動とは違い農大の学生に向けて宣伝するというもので、着ぐるみを着てバラバラを踊ったりしました。今思い返すと、残念なことに宣伝隊のことがあまりにすぎた他の部門の作業にほとんど携わることができなかつたと思います。

大樹、ゆっこ、みずほ、金井、なみこ、まきこ、あっこ、ちか、陽祐、だば、まな。作業をほとんど手伝えなかったのに、野菜の無料配布やロープ警備の補助に人手が足りないうとき、突然のお願いにも関わらず快く手を貸してくれたら、忙しい時間を割いて宣伝活動を応援しに来てくれたりと、同じ3年の皆にはとても感謝しています。大智・龍・美穂・絵梨の4人は、同じ宣伝隊として支えてくれました。自分の焦りもあり4人1人ずつに満足のいくアドバイスをする事もできず、ただ厳しく言うだけで頭にくることも多かつたと思います。それでも逃げずに付いてきてくれた4人は成長するのが早くとても頼もしかった。農学にも頼もしい仲間が3人いるので抜群の仲の良さで宣伝隊を楽しんで下さい。

授業と研究室で忙しい私が、こんなにも宣伝活動に力を入れて取り組むことができたのは研究室の皆さんのおかげ

でもありません。収穫祭が近づくにつれ文展の準備を手伝えず顔を出すことも少なくなっていたのに、会えばいつもと変わらず接してくれ、皆も準備で大変なのにまつ毛のない私を励ましてくれました。家畜繁殖学研究室の皆さんご迷惑をおかけしました。そしてありがとうございます。

最後になりましたが、第6回収穫祭宣伝隊を支えて下さった宣伝隊長市村先生を始めとする参与の先生方、並びに収穫祭実行本部、農友会各部の皆さんにこの場をおかりして御礼申し上げます。



みんなに感謝!!!

神輿隊長

3年 金井俊憲

今収穫祭を準備から思い出すと畜統のみんなには感謝しても仕切れない。おもえば8月から開始した神輿製作は第5回収穫祭が終わってから不安でいっぱいだった。第113回体育祭の後、三浦さんから受け継いだ隊長法被は想像以上に重かった。その重さは責任感と歴史、また自分への不安もあったと言える。そんな中で開始した神輿制服、そーへい(西岡 莊平)、いっくん(増田 翔)、副統のまさし(須藤 真史)とともに開始した。まさしはほぼ毎日来てくれ、神輿完成はまさしの力があってこそだった。ありがとうございます! 8月から10月までの作業の中でそーへい、いっくん、まさしをはじめ3年生、2年生、手伝いに来てくれた1年生の一人一人の力が神輿の一つ一つの部品になった。みんなありがとう! また謝り切れないくらい迷惑もかけた。ごめんみんな! また、神輿のために力を尽くしてくれた宣伝隊長栗田先輩、ありがとうございます。

10月5日、神輿を作り始めて1ヶ月と17日神輿は完成した。しかし神輿を魅せる最高の舞台、第2回厚木パレードは雨天中止になってしまった。前日からの不安、朝の5時に目が覚め見上げた空は雨だった。宣伝隊小屋に行き、中止か決行か話し合っていた時、無情にも雨風は強さを増し

Sports Festival

体育祭委員長

3年 菅澤 奈充子

て、厚パレは中止となった。厚木パレードは第5回収穫祭で第1回を向かえ、三浦さんのアイデアと松本さんの衣装で大成功を迎えた。それだけに第2回厚木パレードへの期待は大きかった。その中で中止、悔し涙がでた。しかし、みんなで衣装に着替え記念撮影と神輿をねったあの楽しさは第3回目生きてくれると思っている。そして体育祭、今年は栗田先輩の計らいと尽力のおかげで厚木の神輿にも順位がつくことになった。順位は4位、自分のふがいなさがみんなの協力をつぶしてしまったと実感せずにはいられなかった。最後のファイヤーストーム投げ込まれた神輿とともに燃え上がる炎は絶対に忘れないだろう。最後に畜統のみんな、そーへい、いっくん、本当にありがとう。



「今年の応援合戦はどんな感じにしようか?」こんな話し合いから体育祭の活動が始まりました。今年には畜産学科初めての女委員長ということもあり、今までとは違う雰囲気、気の応援合戦にしたいという思いがありました。偶然にも、ともに体育祭をやってきた二年生のハルくんとも同じ思いで、すっかり意気投合しました。今年には衣装を作りたい、音楽を作りたいという希望が私にはあり、それをハルくんに言ってみると快く賛成してくれました。本格的な活動が十月から始まりましたが、初めのうちは話し合いをしてもなかなか話が進まず、振り付けもなかなか決まらないという状態が続いていました。しかし、日が経つにつれ本当に焦り、追い詰められた私たちは「秘密の部屋」で必死に考えるようになりました。そして、畜産らしいホルスタイン柄の衣装と、カノンの曲が思い浮かんだのです。

応援合戦の練習も、初めからスムーズにはいかず、問題ばかりありました。二人しか教える人がいないことや、練習になかなか出られない子がいたり、振り付けの細かいところが決まっていなかったり…。それでも練習には笑いがあり、楽しくやることができました。

今年の畜産学科の応援合戦の成績は、残念ながら入賞できませんでした。四位を取ることができました。もちろん入賞はしたかったのですが、結果よりも「思い出」です。今まで以上にみんなが一つになり、のびのびと、畜産学科らしい応援合戦ができたと思います。

活動が始まってから最後までずっと、とつても楽しかった思い出ばかりです。終夜続きでつらい思い出をしたりしましたが、それも今となっては思い出の一つ。三年間の中で一番はしゃぎ、一番楽しかった、一番忘れられない体育祭活動になりました。これも、まとまりないけどやるときややる三年生、笑いの絶えない二年生、かわいくてしょうがない一年生、みーんが支えてくれたおかげです。ホントにホントにありがとう！



ジャック☆

櫓装飾委員長

3年 原 真樹子

収穫祭の最後には世田谷キャンパスで行われる体育祭があります。その学科ごとの応援席をデザインするのが、私に任されたことでした。

今年の櫓のメンバーは一年の時から仲良しで研究室も一緒のあつこと、とても気が利きずつとそばで支えてくれた二年生のゆうこと、私の三人でした。正直、私は委員長になるとは思っていなかったもので、先輩に任命された時から委員長が務まるのか不安でたまりませんでした。

去年の冬頃から、よくあつこと櫓の話をしていました。

「何の絵にしようか!?」と二人して非現実的な案ばかり浮かばせて盛り上がっていたので、具体的に話の内容は進みませんでした。あの時は本当に作業が楽しめで、今思うととても懐かしいです。過去の作品を見ると、牛↓豚↓馬……、ときていたので、やっぱり動物がいいなあと思っていました。そして突然「クジャクにしよう!!」と思いきや、話がどんどん膨らんでいきました。

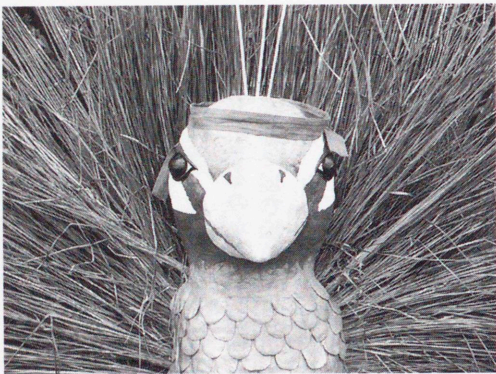
本格的に作業が始まって、最初の頃は順調に進んでいたのに途中からなかなか進まなくなっていました。文展との両立もうまくいかず随分悩み、必要な羽の数を計算すると途方もない数字が頭をかすめ、羽をどうやって支え

たらいいのかもわからず嫌になってしまった時もありました。それでも他の部門も大変なのに相談に乗ってくれたし、みんなのがんばっている姿やらなくてはいけないという使命感みたいなものから最後までやり遂げることができたのだと思います。最後の方は頭の中が櫓のことだらけで、完成した時は達成感でいっぱいでした。

櫓は本当にたくさんの人に助けられて完成しました。まず、私が櫓を作ることだけに集中できたのは体育祭のなみにおかげだし、櫓の組み立て・設置・羽作りはほぼ全員に手伝ってもらい、羽を支えるジャックの土台はようちゃん、ひろき&まさし、金井、に作ってもらいました。本当に本当にありがとう！また、行き詰まった時にアドバイスを頂いた担当の先生や先輩方にも感謝の気持ちでいっぱいです。

結局、櫓装飾の部では15学科中5位で入賞できなかったけど、ジャックを作ることができて本当に良い思い出ができました。きつとベニヤ板30枚に絵を描くことなんて二度とないことだと思えます。最後に……、

あつこへ：何度も何度も紙粘土を買いに行



つてくれてありがとう！たくさん迷惑かけちゃったけど、あつこと櫓ができてよかったです。会計お疲れ様！
ゆうこへ：いつもお菓子と笑顔で楽しませてくれてありがとう！ゆうこが櫓についてくれて本当に嬉しかったよ。来年はまた一人になっちゃったけど、ゆうこらしい櫓を期待してるからがんばってね！

ありがとうございました。

装飾委員長

3年 野田 ちか

「今年も始まるのかあ…」五月の終わりに全体アーチの会議でつい口にしてしまった。

三年生一人、自分で選んだことではあるが常に不安が付きまとい悩み続けた。何をやるにもこれでいいのか、間違っていないのか、期日までにあの巨大な物を完成させることが果たして出来るのか、と。「ともかく何事も早めに片付けよう！」そう思って夏休みに入る前から少しずつではあるが予定を立てて仕事を始めた。この調子でいけば今年から始める事になった「収穫祭一週間前に研究棟アートの設置」も楽勝では…とさえ本気で思った。

しかし、そんな矢先に数々のアクシデントが起き、予定は大いに狂うことになった。また不安がよぎった。「やっぱり間に合わないのでは。」と。でも、どうしても逃げたくなかった。睡眠時間など削れるものは全て削って、自分の全てと言ってもいい位のものの研究棟アートの、畜統に費やした。また想像以上の後輩達の助けがあり、その結果なんとか「一週間前の設置」にも間に合うことが出来た。

設置してからも学校に来る度にもし絵が破れていたら…という不安と闘い続けた。実際、私が抱えていた不安のほとんどは現実に起こることは無く、無事に収穫祭を終える

ことができた。

今までの私にとって収穫祭のイメージは楽しいことも辛いことも半々にあるというものだったが、今年を振り返れば圧倒的に楽しい日々だった。どうして楽しかったのか、というそれは私が三年生ということもあるけれど、たくさんの人に支えられていた事が大きいと思う。大雑把で気まぐれな私についてきてくれた後輩、毎日一緒に笑って、悩んで過ごした統一本部のみんな、そして私が統一の仕事に集中出来るように配慮してくれた家畜衛生学研究室の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました！

最後になりましたが顧問の門司 恭典先生、西脇 充先生、林 甲さん、山口 徹さんを始めとする職員の皆様方にはご多忙にも関わらず、設置等にご協力いただき、誠にありがとうございました。



家畜苑

家畜苑委員長

3年 坂口 陽 祐

自分は家畜苑に携わって今年で3年目だ。1年生の時からこの統一本部に在籍し、その時から収穫祭の時期は家畜苑の一員として過ごしてきた。今年は統一本部の最高学年となり、自分は家畜苑の委員長を任される事となった。

家畜苑を通じて来場者に何を伝えたいか？最初に私が考えたのはこれである。家畜苑が「家畜苑」たる所以は？同じ動物を展示する場所、ではあるが動物園ではない。産業動物としての家畜を展示するのである。

私が家畜苑を通して伝えたいモノ。それは命である。我々は彼等の命を糧に生きている。普段食卓に並んでいるものたちは、彼等の産業動物としての命を削って生み出されるのである。

私達の命は、他の命を貰って生きている。この事が認識出来る場を、創りたかった。そして来場者の反応から、伝える事が出来たと思う。来年もまた、後輩には何を伝えるかを考えぬいて家畜苑を続けて欲しい。

編集後記

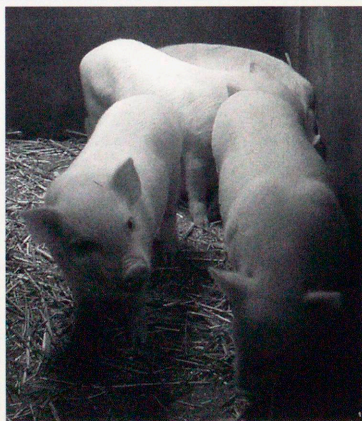
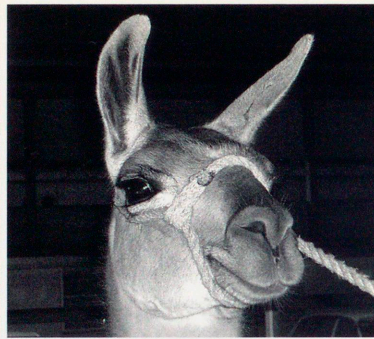
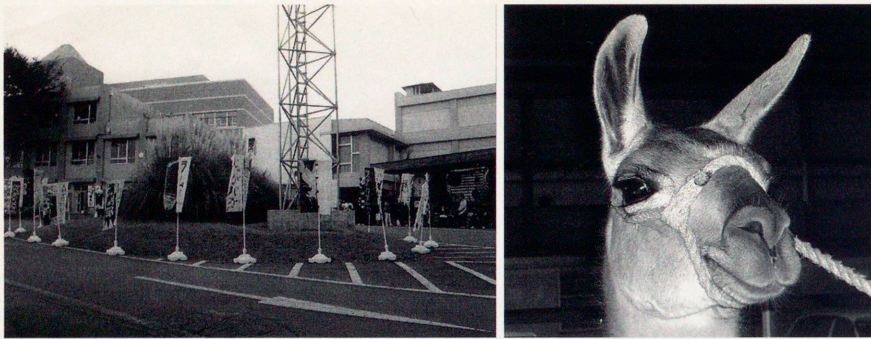
今年も、第42号目となる「ふじみの」を発行することができました。

農学部が厚木に移転し6年が経ち、カレッジ講座や厚木農場生産物販売など農大らしいイベントも一般の方に定着し、厚木キャンパスもすっかり有名になりました。現在開設されている農学科・畜産学科に加え、平成18年4月にはバイオセラピー学科の増設が予定されており、学習の幅が広がることに期待しています。

この「ふじみの42号」が、今後の畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、この一冊を発行するにあたり、お忙しい中原稿を書いて下さった先生方、ならびに会員の方に深く御礼申し上げます。

編集委員代表 関 綾 乃



平成18年3月20日 発行

“ふじみの”第42号

ふじみの執行委員 関 綾 乃
谷 口 絵 梨

発行者 神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学農学部畜産学科畜友会
電話 046(270)6228

印刷所 神奈川県厚木市栄町1-15-15
有限会社 藤野印刷所
電話 046(221)3029

表紙写真撮影者：畜産学科2年 松平恵理

